五月になっても部室からコタツを撤去させない男、それが大庭である。

　は部長である。大学三年。ダメ人間の第一線を行く男。彼女なし甲斐性なし卒業見込みなしのないない尽くしのドンマイ人間である。彼とニートを区別している点は、まがりなりにも彼が大学生というところである。

　それが大庭雅志という男である。

　彼が今心血を注いでいることが一つある。それは、部室からコタツを撤去させないことである。

　彼はコタツの布団にしがみ付いて断固座り込み――否、寝込み、の姿勢を取った。

「我々は断固反対である！　コタツをこの部室から撤去することはまだ早すぎるのである！　考えてみろ、いきなり冬眠から叩き起こされたウサギはどうなる？　クマは？　リスは？　凍え死ぬだけだ！　生物には必須なエネルギーとして、温かさというものがある！　温かさ、そう、それは――あっ、あぁ！　あぁ――！」

「いいかげんにしろ！　このダメ人間！」

　引っぱがされて、その楽園の象徴はずこずこ運び出されてしまう。

　がっくりと頭を垂れる。

　ぽたり、と一滴の涙。

「そんな……あ、あんまりだ」

「これ、んちに運んどいてくれる？　大丈夫？　あんた場所わかる？」

「うっす。わかりまっす」

　瀬戸とのやり取りが部室外から聞こえる。

　瀬戸は、ひょい、と顔を部室の中に向けて、絶望の海に沈んでいる先輩の頭部を見て、哀れそうに眉を下げる。

「先輩……さすがに、五月にコタツは無理っす」

　そして、とどめを刺した。

　大庭は倒れ伏した。

　が部室に入ってくる。

「あんたねえ。いいかげんにしなよ。まだ沈んでるわけ？　五月にもなってまだ部室にコタツ置いてるサークルなんか、見たことないよ。ったく咲のやつ……」

「おまえは人殺しだ……」

「あん？」

　美しい顔を持つ副部長、神月里菜は顔を上げる。

「冬眠中で腹をすかしているこの私を――っ！」

「うざっ。人間は冬眠しないし腹空いてんならそこのコンビニでおにぎりでも買ってくればいいでしょ」神月は窓の外に目をやって、行けと命じた。「さっ、どいたどいた。これから掃除するんだから。ったく、こんなものがあるから人間は堕落するんだ。部屋は汚れるし、精神が汚染されていく。ちょうどあんたのようにね」

「……」

　精神が汚染されていると断定を受けた大庭は、がっくりと首を曲げた。そして、神月に床に転がってるゴミのように押し出されるまで、そのままでいた。

「邪魔なんだよ。っていうか何もしないでずっとそうしてるんなら、手伝ってよ」

　大庭はむっくりと起き上がった。

「……しかたない。しかし、これだから女というやつは……」

「そっくりそのままあんたにそれを返してやるよ」

　無駄口を叩きながら、二人はもそもそてきぱきとゴミやいらなくなったものをまとめ、床や壁をぞうきんで拭いていく。

「ああ……何だか寒い」

「これから嫌でも暑くなって、心の弱いあんたはクーラーが欲しい、扇風機が欲しい、海へ行きたいとか言い出すんだろ」

「む……まだ言ってないではないか」

「昨年、一昨年の言動がそう証明してるよ」

「私はそんなことを言っただろうか」

「言ったでしょ」

　神月は肩をすくめた。

「あんたウェブの日記に、『私は夏が好きだ。あのジリジリとした暑さが待ち遠しい！』とか書いてたじゃない。普段でも『はやく夏が来ないかなぁ』『寒いのはウンザリだ！』とか言いまくってたし。それで夏が来てみりゃぁ、『ひどい暑さだな！』『こんな時に外を歩くやつはどうかしてるぞ！　図書館に行こうではないか！』って言ってたでしょ。ウェブには、『私は汗をかくから夏が嫌いである。はやく寒くて過ごしやすい冬が来てくれないかなあ！』って。アタシゃ、それを見たとき、ああこいつはだめだな、って思ったね」

「ひどいじゃないか！」

「え？」

　きょとん、と神月は目を丸くする。

「そう思ったら、ひとつコメントでも！」

「あぁ、あんたいつもコメントゼロだもんね」

　哀れだなぁ、という目でうすく笑う。

「あんた、こんなコメントもらって嬉しいの？」

「何もないあの一人ぼっちの寂しさよりはいいものだよ。罵倒というものはね！」

「あ……そう……」

　神月は顔を引きつらせつつ、くるりと背を向け、ゴミ箱のゴミを片づけ出す。

「あんたさ、このゴミまとめておいてくんない。アタシ、学生課に行ってゴミ出しの申請してくっからさ」

「よかろう。引き受けた！　ゴミはまかせろ！」

「ゴミはゴミに、ね」

「何か言ったかね！」

「いいや何にも！」神月はにっこりと微笑んだ。そうしてシャツの第一ボタンを開けて手で扇ぎながら、部室の外を見た。

「アタシこれからフランス語の授業行くんだけど、あんた何かある？」

「何もないぞ！　そうだなぁ、ここで一人で漫画でも読んでいるか！」

　楽しげに笑う大庭部長に、またもや呆れた眼差しを注ぐ神月副部長だったが、溜息を一つつくと、世話を焼く者の眼差しになって、まるで彼のお母さんみたいに、口々に注意を促すのだった。

「あんた忘れてるかもしれないけど、アタシ四限英語で五限ゼミだから。チョー忙しいんだけど、ついてねぇからしょうがない。いい？　あんたは三限終わってから来るさつきと咲と一緒に二宮ちゃんのバースデーパーティの準備をすること。たぶん瀬戸も運び終わったら戻ってくっはずだからさ。そういえば、あんたまだ二宮ちゃんのバースデープレゼント買ってないよねえ」彼女は溜息をついて腕を組んだ。「ほんとどーしようもないやつ。いい？　瀬戸が戻ってきた段階で買いに行けよ？　上野でも、池袋でも好きなほうでいいからさ。瀬戸と一緒に買って来い。二宮ちゃんは四限で終わるって言ってたけど、次の日の一限の予習とレジュメプリントしてから来るって言ってたから多分遅れる。ま、五時くらいには来るでしょうよ。ちゃんと祝ってやれよ？　アタシいないんだからさ。不安なんだよ」

「はい、はい」大庭は母の小言を聞かされる息子のように寝っ転がったまま片手だけで返事をした。

　大庭の目線は漫画のページに注がれている。

「うっぷくくく」

　と、漫画のギャグシーンに頬を膨らませている大庭に、神月が頭に血管を浮かべた。

「聞いてんのかおまえはぁー！」

「うぷぷぐっ！」

　鳥が胴体を掴まれたような不気味な声を上げ、大庭は横転する。

「何をするのだおまえは！」

　こめかみを押さえたまま立ち上がる大庭。神月は拳をじっと見下ろし、大庭の頭のそれがヒットしたところを見ながら、答えた。

「脳の伝達を障害しているしこりがあったから、アタシがそれをほぐしてやったんだよ」

「え……？　なんだって？」まだジンジンするこめかみから手を離して、大庭は歓喜した。

「おまえはそんなことができるのか！　すごいな！　将来はきっとそれで食っていけるに違いないぞ！　おお……気のせいかもしれんが、体が軽くなった気がするぞ！　ありがとう！　神月！」大庭ははしっ、と神月の両手を胸のところで合わせるように掴み、まるで命の恩人に巡り合えたかのように熱狂した。「私の脳の、伝達をしているしこりをほぐしてくれて！」

　神月は、大庭に顔を近づけられて、気味悪そうに、顔を後ろに下げた。

「あんた……おかしいって。はっ……もしかしたら、アタシは大庭の大事なところを壊してしまったんじゃ？」

「なーに言ってるんだ！」

　大庭は手を離して、非常に元気よく腕をぐりぐりまわし、最後にむきっとマッスルポーズを取ってみせた。

　彼の茶色いジャケットがぱらりと揺れる。

「このとおり私は大大大、大元気だ！　なにしろ神月に脳のしこりを取り除いてもらったんだからな！　よぅーっし、みんなにも自慢しよぉーっと！」

「いっ、いやいやいや！　アタシがやったってことは言わないでおくれよ！」

「む……何故だ？」

「あー……えーっと……」神月はふと腕時計を見つめて、ぎょっとした。「やだ！　もうこんな時間？　フランス語の授業が始まっちゃう！　悪い、大庭。アタシが今言ったことはよく覚えておいて。二時半にさつきと咲が来るはずだから、それで瀬戸を合わせてバースデーパーティの準備をしておいて。プレゼントを買ってないあんたはちゃんと買っておけよ！　あとアタシがあんたの頭を悪くしたことは誰にも言うなよ！　いいか、誰にもだぞ！　いいね！　それじゃ！」神月はノートの入ったエナメルのバッグをつかまえて、慌しげに突き当りの階段を降りて行った。とんとんとんとん、とんっ、と最後の二段を一気に飛び越すジャンプ。すとん、とタイル床に着地する音。それからほぼ連続的に床を駆ける音が聞こえたかと思うと、ギィ、とやや重いガラスの扉を開けて、足音は、見えない青空のもとへと去っていった……。

　大庭は、部室の中を見回しながら、ふと窓の開かれた青空に目を留めると、首をひねった。

「あいつは何を言っておるのだ？　だから、頭を悪くしたんじゃなくて、頭を良くしてくれたんだろうが。神月はどういう意図をもってあんなことを……」大庭はふとおめめを大きく開いた。「あ、そうか！」ポン、と手を打つ。「照れていたんだな！」

　大庭はニヤニヤ笑いだした。

「そーかそーか！　神月のやつめ、日頃から人のためになることに慣れてないせいか、この私の怒涛の感激ラッシュに照れくさくなってしまったんだな。いやー、モテる男はつらいな！」

　人は、このような男を俗に「ダメ人間」と呼ぶ。

「いやいや、しかしさすがに神月の療法は素晴らしいな！　頭がスッキリして、先ほどの伝言を全て覚えられたぞ。えーと……二時半に西野と美奈川がやって来るから、瀬戸と二人で心して待て！　か。バースデープレゼントとは誰のプレゼントであったかな。あれ、おかしいぞ。思い出せん！　いや、さては、神月のやつ……言い忘れていきおったな！」大庭は呆れて憤慨した。しかしすぐに彼の笑みへと取って代わられた。

「何てことだ！　照れ屋さんの上におっちょこちょいさんだったとは！　カワイイではないか神月！　ウハハハハハ！」

　彼は天井を見上げて馬鹿笑いした。

　いとも間抜けで憐れみを誘う光景である。

　彼は高笑いを終えると、早速地べたに横たわって、漫画を読み始めた。

「時機が来ないうちは焦らず待て！　焦っても始まらん！　私はたくさんやることがあったのだ。まずは、この『シティハンター』を全巻読破せねば！　はっはっは！　そしてその後は、あのゲームを攻略して……」

　たまに世の中に、遊ぶのが忙しくてたまらんわい、と言ってのける人がいるが、この男ほど真面目にそれを口に出す者もいないだろう。

　事実、彼の頭は、遊びが八割、食事が一割、勉強が○、三割、あとの○、七割はカステラでできていた。

「おー……」

「おつかれさんですっ！」

「つかれさんです」

　二つの高い声が、この「演劇部室」に響いた。そう、「演劇部」である。

　それがこの部の名称と形態であった。

　二人が訪れたとき、彼女らの部長は、タイル張りの床に、申し訳程度に座布団をしいて寝そべっていた。

「おぉ、西野に美奈川。ようやく来たか」

「あれー、コタツ、取っ払っちゃったんですかー！」

　口に手を当てて仰天したのが、西野さつき。二年の女子である。

　茶色のキュートなボブヘアーを被せて、顔は天使の微笑み。若干鼻の左右にそばかすがあるが、それがまた彼女の素朴な可愛さを引き立たせている。

　代わってもう一人の方は、。同じく大学二年。大学の紋章が入ったカバンを持って歩いてないと、中学生がただ私服を着ているようにしか見えない。黒髪で長い。先ほど撤去されたコタツの所有者がコイツであって、その事実のとおり、いかにチビといえど馬鹿にできない存在である。

「別にいいんだよさつき。あんなの、ただの部長の我がままで置いてただけだもん」

　もう一つ美奈川咲の特徴を挙げるとすれば、生意気で毒舌家。あとも一つおまけにチビ。チビ。チビ。

「我がままとは失礼な！　私はただみんなが喜ぶと思ってだな――」

「あー疲れた。やっぱいいね、こう、布団とかもっさもっさしたのがないとね。ひろびろ～、っと使えるというかさ」咲はカバンを置いて自分用のクッションに腰かける。

「そうだね～」

　西野もカバンと白のベレー帽を置いて、腰を下ろした。

　完全に無視された大庭は、怒りを溜めて、それを一つの「フンッ」という鼻息に変換した。

　再び寝転ぶ。

「私の心はこのがらんどうになった部屋と同じさ……」

「ＤＳとＰＳＰもあるでしょ」

「トランプも将棋もあるよねー」

「……」

　大庭は目を擦って起き上がった。

「それはそうと、おまえらが来たら何かするように言われていた。何だ？」

「部長……部長も部長なんだから、部の行動計画くらい知らせてもらったら？　あ、そっか、まだ知らせてないのか……」

「は？　おいそこ、まさか部長に内緒で……っていうか、部長をのけ者にするのか、重罪だぞ、それは！」

「別に形だけなんだからいいでしょ」

「ちょ、ちょっと咲ちゃん……」

「この私をのけ者にしないでもらおうか！」

　両者竜虎のように睨み合う形だったが、その間でオロオロしている西野さつきが目に入ったからか、咲は力を抜いて溜息した。

「一年生の誕生日会があるんだよ……今日は何日？　大庭部長」

「ぬ？　はて、何日だったか？　そういえば五月の中旬くらいだったと記憶しているが！」

「……正確には五月二十四日ね」

「……もはや中旬じゃないね」

　咲は、しょうがねぇなぁ、というような溜息をついた。

「一年生の名前は覚えてる？　クソぶ……大庭部長」

「おお覚えているぞ！　さんだろう？　ん？　おいちょっと待て、今なにか言いかけてなかったか？」

「その二宮鷺子ちゃんが今日誕生日なんだってさ。あたしらのサークル入りたてだし、よければ懇親会的なものを……っていうのが神月先輩の」

「そうですよー。ちゃんと覚えてました？　部長」

　大庭は頭を巡らせた。

「そういえばそんなことも言われてたような……ハッ、そうだ。そういえばバースデープレゼントがどうとか言っていたな！」

「やーっと気づいたのかよ。どんだけ部長の自覚ないの？」

「わたしたちは、部室の飾りつけをやっておくので、大庭部長と瀬戸君には買い出しをお願いしたいのです。……っていうか、まだバースデープレゼントがないならそれも」

「一年生に気に入られようってドでかいプレゼント買ってくんじゃねぇぞぉー」

「うむ。そういえばおまえら、プレゼントは何にした？」

「わたしはお菓子を！」

「あたし、手作りのビーズストラップ」

「なにぃ！」

　大庭は仰天してとび上がった。

「おまえ……意外とスペック高いな……手作りとは生意気な」

「ふふん、真似できんだろ？」

「ぬぅ……っ」

　再びいがみ合う大庭と咲だったが、ある人物が部室に入ってきたことで、その緊張も解ける。

「ちぃす。大庭先輩。咲も西野も、お疲れ」

「お疲れさまー、瀬戸君！」

「おぉ。つかれー」

「おぉ、ようやく来たか、よ！」

　瀬戸亮太は唯一の二年男子である。背が百八十二センチと高く、このような文化系のサークルに似合わぬたくましい体つきをしている。

　頭も短く刈り込まれていて、爽やかさ抜群。髪が短くても不思議と似合ってしまう男らしいやつであった。

「先輩？」

「いや、よくいいところに来てくれた！　やい、そこのチビ助！」

「あたしのことチビ助って言うとひっかくぞこの野郎」

「いいか、おまえに教えてやろう。プレゼントとは……手作りではない、金だとな！」

　大庭は自信満々に宣言した。

「えー」

「わかってないお子様のおまえに証明してやるために今から私は瀬戸と二宮ちゃんの誕生日プレゼントを買いに行く！　誕生会の会場準備は任せたぞ！　おまえたち！」

「二度と帰ってくんな、馬鹿野郎」

「……何だかつっこみどころ満載ですけど、こっちは任せてください！　部長！」

　大庭は未だ事情をよく呑み込めてない瀬戸の肩に手を回し、咲の顔を見下ろした。

「後悔するなよ……チビっこ。あとで二宮ちゃんが私の大人の魅力に惚れてしまっても文句言うなよ」

「そんなことは絶対あり得ないから思うぞんぶんあがいて玉砕してこい、このクソ部長」

「せいぜい粋がっていればいいさ！」大庭は瀬戸の肩をポンポンと叩いた。「さ……行くぞ。瀬戸よ」

　瀬戸は当惑しながら、「は、はぁ……」とつられて歩き出し、最後にちょっと振り返って、「ごめん。またな」と二人に手を振った。

　大庭に肩を掴まれたまま階段を降りる。

「何なんすか、先輩……咲と喧嘩でもしたんですか」

「いや、していないが」

　出口に近付いたところで、大庭は瀬戸から手を離す。

「どうもあいつは先輩のこの私を尊敬していないようなのでな……。ひとつ、威厳というものを取り戻そうと思ったまでだ」

「なーるほど……」

　ギィ、とガラス張りの出口を開いて、爽やかな風の吹く外へと出る。

「それであんなことを……咲のプレゼント対決っすか」

「そうだ。本人によると、あいつは手作りのプレゼントを用意しているらしい」

「てっ、手作りっ？」

　瀬戸は足を止めて仰天する。うむ、と大庭はかけている眼鏡を直す。

　瀬戸はすぐに落ち込んだ顔を作った。

「手作り、かぁ……」

「どうした、瀬戸よ」

「やっぱプレゼントは、手作りっすかねぇ……」

　瀬戸はパンツのポケットから、黄色い紙で包装された、小さな箱を取り出した。

「何なのだ、それは」

「リボンっす。彼女、二宮ちゃんに付けてほしくって……」

「なんだと」

　大庭は目を見張った。

　瀬戸のことをじっと量るように見つめた。

「瀬戸よ、二宮さんはまだ我々とそう面識は深くないよな」

「ええ、そっすね」

「それとも二人で会ってたのか」

「いえ！　ぜんぜん！」

「重くないか」

「え？」

「そのプレゼント、ほぼ初対面の人に渡すにしちゃ、重くないか」

　瀬戸は茫然とした。衝撃が体中に走り、動きがとれなくなった人になっていた。

「おまえまさか……」

「……」

「惚れたのか、もう！」

「……」

　瀬戸はむっつりと黙ったままだったが、やがて、顔中の筋肉をだらしなく弛緩させて、「でへっ」と笑った。

「でへへ」

「なんだもう、早すぎるじゃないか……硬派でとおっていたおまえが」

「いやっ！　二宮さんはマジでカワイイっすよ！　背がちっさくて、肌が白くて、真面目そうで……それに三つ編みでメガネってのも自分的にポイント高いんすよ！　ほら、なんていいますか、清純そうで……」

「なるほど……」

　大庭はずれた眼鏡を直した。

「それでおまえはリボンを……」

「そうなんすよ……」

　瀬戸は落ち込んで地面に手がつくぐらいにだらんと肩を落とした。

「似合わないって、わかってるんです。小、中、高、とスポーツ三昧で暮らしてきた自分が、今更こんなちゃちいプレゼントを買って、あんな文化系な女の子を彼女にしたいって望むなんて。……高望みっすよね。似合わないっすよね。筋肉もりもりのスポーツ野郎が、あんな、触ったら折れちまいそうなお人形さんみてぇな彼女を、好きになるなんて……美女と野獣っすよね。お化けと少女っすよね。ゴミと天女……」

「だがおまえは努力をしてるじゃないか。文学だって読んでるんだろ」

「ええ。自分の目標のために、頑張りました。最初はなに言ってっかわかんなくて読むのに三か月かかった夏目漱石も、今ではだいぶ読めるようになりました。わけわかんなくて頭がぶっ壊れそうになりながら読んだ福沢諭吉の本も、今ではいい友達です。演劇をやるのも観るのもすげぇ楽しいって思えました。そんな自分がいかしてて好きで、これならいい先生になれるかもって……でも、……」

　瀬戸は頭を抱えた。

「二宮鷺子さん！　どうしてあなたは後一年待ってくださらなかったのか！　おれはまだ未熟だ！　きっと失望するに違いねぇ、きっとおれのことを筋肉馬鹿だと罵るに違いねぇ！」

「まぁ、まぁ、瀬戸よ」

「うぅ」

「まだ二宮さんの好きなタイプが決まったわけでもないだろう。ひょっとしたらスポーツ選手のような爽やかなメンズが好きかもしれんし。勝算はまだ十分にあるぞ。瀬戸よ」

「……そっすかねぇ……」

　瀬戸と大庭は並んで歩いた。キャンパスの並木道を過ぎ、街の大通りへと出る。

「ただ、そのプレゼントはやめておけ」

「……や、やっぱし……。やっぱ手作りのほうが！」

「ちがう！　おまえにはさり気なさが足りないというのだ！　そんなマジものを渡してみろ！　心の準備ができてない二宮さんは困惑するだけだぞ！」

「でもっ、咲は手作りを渡すって！」

「……瀬戸よ」

　大庭はあきれの溜息をついて、首を振った。

「忘れていないか。咲は、一応のところ女だ！」

「はっ！」

　瀬戸は口を開けた。

「同性と異性の違い。――その差は、月と太陽ぐらい離れている。……忘れるな。自分はまだアウェーだということを」

「そ……そうだったんすね。わかりました！　先輩！　あざっす！」

「瀬戸よ。そのプレゼントは、付き合う寸前まで、とっておけ」

「そうしまっす！　いやー、よかった！　危なかったっすねぇ！　危うく嫌われちまうとこでした！　やっぱおれ、アホだなー！　ほんっと、先輩のおかげっすよ！」

「よせ、よせ。たいしたことではない」

　アホの大庭は有頂天になりながら、歩道を歩いていった。

「そうだ。これから、どうします？　自分も、今から『さりげないプレゼント』を買わなくちゃいけないんで、お供しますけど」

「最初からそのつもりである。私は何とかして美奈川咲めの鼻を明かしてやらんといかんのだ」

「それなんですけど、事の発端は何だったんですか？」

「理由など忘れた。ただ、私には、あいつのでかい態度を今一度矯正し、先輩としてしかるべき敬意を払われる存在になる義務がある」

　そのために自己研鑽ではなく、勝負によって打ち負かしてやろうという幼稚な発想が目標を遠ざけていることなどアホの大庭は知るよしもない。

　大庭はまるで大戦に臨む軍師のような面持ちで、眼鏡をぐいっと押した。外見だけ。

「美奈川咲の狙いは我々男子陣の権威を剥奪して、あやつの天下を築くことだ。我々を奴隷に欲しがっていると容易に想像できる。そうであるのに直接的な手段に出てこないのが奴の小狡い所よ」

「そっすかねぇ……」

　瀬戸はズボンのポケットに手を突っこんで牛丼屋の前を通りすぎた。

「あいつのおばあちゃんはすっげぇいい人ですけど。さっきもレンタカーでこたつ咲んちに返しに行ったら、お茶とお菓子ごちそうになったし」

「それはつまり、おばあちゃんはおばあちゃんでいい人、ということだ」

「なるほど」

　大庭と瀬戸はタメにならない話をしながら駅に向かった。

　駅の構内に入って、瀬戸は大庭に尋ねた。

「今更ですけど、レンタカー返さないほうがよかったっすかね。まさか、もう今日はこれで用事はねぇと思ってたから」

「よい。電車の方が身軽ですむ」

「それで結局どこへ？」

「どこがいいか……」

　瀬戸は悩む大庭を見て、嫌な予感がした。

「先輩。お尋ねしますけど、先輩はちゃんと予算多く持ってるんすよね？　自分は、貧乏なんで、金で勝負ってわけにはいきませんけど……」

「ん。千三百円だ」

　瀬戸は衝撃が走った。

　口をあんぐりと開け、目をぎょろんと見開き、先ほどと変わらぬ冷静な面持ちで賞賛のまるでない戦いを語っている大庭の目を、口を、鼻を、見つめ続けた。

　そして、致命的な一言を伝えた。

「……金、貸しましょうか？」

　プオーン！　と電車の警笛が鳴って真上の高架線を通り過ぎて行った。……

「おたんじょうびっ！」

「おめでとぉー！」

　パンパンパンとクラッカーの音が部室内に鳴り響いた。大庭に押されて入ってきた二宮の目の前には、見るも見事なバースデー会場が用意されていた。

　壁から壁に、そして天井まで、世界各国の国旗がかけられ、人形劇で使ったぬいぐるみたちがちらほら。中にはホワイトボードに『お誕生日おめでとう！　イヤッホー！』と書かれたものを掲げているウサギちゃんもいた。

　さらに中央にしつらえたテーブルには大きなホールケーキが。その真ん中の板チョコ部分には『二宮鷺子ちゃん１９歳おめでとう☆』と白文字でデコレーションされていた。

「おめでとう。一年生」

「あ……あ……皆さん……ありがとう、ございます……」

「いいってことよ！　ささっ、座りたまえ！　今日の主役はあんただ！」

　鼻眼鏡マスクをつけた奇態な西野が、二宮を中央の席につかせる。

「ラ～イツ、アウッ！」

　彼女の合図で電気が消されると、ぼうっと、闇の中にケーキの蝋燭が浮かび上がってきた。

　その蝋燭のバラ色の明かりに照らされた二宮の顔は、驚きからみるみる歓喜の笑みになっていった。

「すごい……」

「よしっ！　みんな、歌え！　今宵の宴にふさわしい人類誕生の歌を！　さん、はい！」

　ああ

　千年の河よ

　おまえが生まれて

　よかったと

　アメリカの地で

　笑ったよ

　愛するロッキー

　そうさ　おまえの名は

　ホーリーウッド

　そうさ　おまえの名は

　ホーリーウッド

「いぇ～い！」

　ぱちぱちと大きな拍手が。

　その中心で一人だけ、二宮は呆然としていた。

「あの、今の歌は……？」

「ささっ、どうぞ！　蝋燭の火を消してくれたまえ！」

　どうしてか一番ハイテンションになっている西野に促されて二宮は「あ、はい……」と困惑を隠せないまま蝋燭に息をふきかける。

　ふぅぅぅ。

「……あれ？」

　ふぅ、ふぅ。

「どうした一年生。消せんのか」

「こんなとこでも可愛いじゃないかっ！　このずるいっこちゃんめ！」

「二宮さん、慌てずに、一個ずつ消してみな」

「は……はい……」

　大庭、西野、咲から声をかけられ、二宮は顔を赤くしながら、もう一度息を吸い、ふぅ、ふぅ、ふぅ、と一個ずつ消していった。

　そんないじらしい様子を見て、彼女に恋してしまっている瀬戸は、汗を額にためてこの中で一番顔色悪そうに見えた。誕生日の最中だというのに。

「ふぅーっ！」

　ようやっと最後まで吹き消し、「いぇ～い！」と拍手と歓声が上がる。電気が欲しくなったので大庭が電気をつけると、二宮は中心で背を曲げてうつむいていた。

「あの……すみません。私、緊張してしまって……」

　顔を赤くして恥じらっているらしい。

「本当に、ありがとうございます。こんなふうに祝ってもらえたの、家族以外で初めてで……。あの、ところで、」

「よいのだ。せっかくの大事な大事な一年生の誕生日だ。はやく馴染んでもらいたいからな。今日は楽しむといいぞ」

「はい。ありがとうございます。私なんかのために。……あのところで、さっきの歌は何ですか？」

「あれか？　あれは、古来から我らサークル『演劇部』に伝わる合唱歌だ」

「合唱歌……」

　目が点に、口が半開きになっている。

「誰が作ったのか定かではない、古くからある歌だ。おおかた、アメリカに行った大正の青年が、感動を込めて歌ったのだろう。まさに赤い大地の力強さ、アボリジニのたくましさが伝わってくる作だと思わないか」

「アボリジニはオーストラリアだよ」茶々を入れる咲。

「どっちでもよろしい。とにかく、ここにいる全員が誕生日の際に贈られたありがたい歌だ。二宮さんも是非覚えてくれ」

「はぁ……」ありがたいと言うわりに扱いがぞんざいな大庭。そして困惑が隠せない二宮であった。

「ねーねーそんなことよりケーキ食べようよケーキ。あっ、二宮ちゃん。名字じゃ堅苦しいから、『トキちゃん』って呼んでいい？　わたしのことはさっちゃんでいいよ」

「さつきとはもう会ってたんだ。あたしのことも好きなように呼んでいいよ。二宮さんのことはあたしも名前で呼ばせてもらお。鷺子ってキレイな名前だよね」

「は、はい。あの、その……」

　女同士でもう輪を作っている彼女たちに、部屋の片隅に控える大庭はよしと頷いた。そして隣を見てみると、目の白み部分を充血させて、緊張のために肌を赤黒くしている瀬戸を発見した。

「大丈夫かっ、瀬戸！」

「……ん、んむぅ……」

「息をしてないのか！」

　大庭は軽く頬を叩いてみた。

　瀬戸は気付く。

「はっ！　げほげほ！　うぇっ！」

「瀬戸ぉ！」

「だ……げほっ！　だいじょうぶ、です……」

「貴様、なんか悪いもんでも食ったのか？」

「いえ……。腹はみごとに空いています。昼にカレーと、咲んちでせんべい喰ってからは何も食べてません。ケーキも非常においしそうに見えます。健康でバッチリです」

「だったら何が……」

「……」

　瀬戸は無言で「ほら、アレだよ」とも言わんばかりに顎で二宮をしゃくってみせた。

「瀬戸……」

　瀬戸は二宮を見ると、両目をキラキラと輝かせ、ウルウルと涙を流し、それから赤黒く石化するのだった。

「命に別状はないんだな？」

「もちのろん、です。っすけど……二宮さんに、彼女に、何て声をかければいいかわからなくて……。咲や西野みたいに『おれも鷺子って呼んでいいかな？』って言いたいんですけど。気安く。だけどおれの声帯はそんな言語機能持ってないみたいで……」

「そういえばおまえ、さっきから一言も口にしていないな……」

「ええ……。はやくしなきゃ、って逸る気持ちもあるんですが、咲たちのあの気安さや馴染んでいるあの空気を前にすると、なんか唐突に体が石のようになってしまって……」

「おい。その状況はまずいぞ。存在が空気並みに薄くなっている。せめて名前だけでも憶えてもらうために頑張るのだ！　それ！　ゆけ！」

「……」

　瀬戸はすわった目で、赤黒い頬をしながら、彼女らの交わりを見つめているだけであった。

「どうした、女々しいやつめ。さっさとゆけぇ！」

「う、わっ」

　瀬戸は大庭にドンと押されて、不可抗力という力にすがり女子の輪の中に飛び込んでゆく。

　だが、そういった時の風当りというのは無論激しいわけで……。

「うひゃ！」

「おい、どこ触ってる」

「はっ！　スマン、スマン！」

　慌てて起き上がろうとする瀬戸だが、その拍子に咲の変な所をまた触ったらしく、咲の小さい手で見事なストレートをもらった。

　ストレートは顎にクリーンヒットした。

「いてぇ！」

「……原因はわかってるから責めないけどね。いくら気安い仲だからって最低限のルールは守れよ。あんたも、あたしにアソコかんちょーされたらいやだろ？　べつにしたくもないけど」

「……」

　瀬戸は顎を押さえながら、咲の顔をゾッとした目で見下ろした。この二人は学部が一緒なので二年で一番仲が良く、家も近いからよく一緒に帰ったりしているが、男女の恋沙汰にはならない親友である。

「……ス、スマン。は！」

　瀬戸は向かいの席で二宮が唖然としてこちらを見ているのに気がついた。

「あ……あ、あ、」

「……」

　妙な沈黙が漂い始めたところを、

「いやーん！　瀬戸君ったらエッチ助平！　さりげなく触ってくるなんてもーずるいんだから！　……ねぇ、ねぇ、」

　西野が嘘くさい演技で一瞬その場を取りつくろうと、小声で、真剣な顔で先に話しかけ始めた。

「わたしこれで合ってた？　このリアクションでオーケーだった？　瀬戸君変に思ってないかな？　っていうか、何で？　何が起こったの？」

「知らないよあたしも」咲は幾分めんどくさそうに答えた。

「あー……の、のー……」瀬戸が気味悪くも恥らっている。

　すっくと立ち上がった。

「……おれ、瀬戸。よろしくな」

「……は、はい。……瀬戸先輩」

「うん。ちなみに下の名前は亮太。誕生日おめでとさん。一応同じ十九だな。おれの誕生日来るまでな」

　瀬戸はおずおずと手を差し出し、二宮鷺子と握手する。その白い手と触れ合ったときに彼の目が数ミリ大きく開いたのを知るのは大庭のほかない。

「演劇ではよろしくな。一緒に頑張ろうぜ」

「あ、はい……」

　咲も西野も大庭も、呆然としてその二人を見ていた。

　白々しいセリフの後には温度が下がる。室内の物理的温度ではなく。

　場を紛らわそうとした大庭は、叫んだ。

「そ、そうではないか！　忘れておったぞ！　そろそろ誕生日プレゼントお披露目の時間だ！」

　何が「そう」なのかは誰一人として知らない。

「そ、そーですね！　ねぇ、トキちゃん！　サークルのみんなからお祝いのプレゼントがあるんだよ！　じゃーんっ！　わたしはクッキー！　ねね、これすごいんだよ！　わたしのバイトの先輩に教えてもらって、チョーウマイんだよ！」

「わ、す、すごいです。わぁ、あ、ありがとうございます。すごく嬉しいです」

「ちなみにあたしも。ほら」

　うまく場が元通りになったことを見た大庭はフゥと息をついた。眼鏡を直し、デレデレと頬をゆるめている瀬戸の肩に手を置いた。

「中学生か、おまえは？」

「え～？　なんすかぁ～？」

　デレデレしているところは酒に酔ったオヤジに似ている。

「そりゃ咲に言ってやってくださいよぉ～。知ってます？　あいつ中学一年から背伸びてねーんすよ」

　大庭はショックを受けた。

「なにぃ！　そうであったのか……そうなんじゃなかろうかと薄々思っていたが……本当なんだな」

「そっすよぉ～。あーそれより、自分やったっすよ。二宮ちゃんと手つないじゃいました」

「……」

　大庭は無言で眼鏡をかけ直した。

「瀬戸よ……」

「ん？　なんっすかぁ……」

「おまえ共学だったよな？　高校」

「え？　そっすけど……ぐふふ」

「……女の子にはモテなかったのか？」

「へ？　なぁに言ってんすか先輩！　そんなことは今関係ねぇーすよー！」

「……う、うむ。しかしおまえのその喜び様がな……」

　大庭はチラ、と横目で二宮の様子を見た。

　二宮は目をぱちぱちとさせて、女子たちの饗応に必死についていっているようであり、高い確率、先ほど瀬戸と手をつないだこと、会話をしたことなど些末事として脳裏に追いやっていることだろう。

　大庭はもう一度瀬戸亮太の顔を見た。

「頑張ろうぜ。って、自分かっこよくキめれたっすかねぇ～。あー緊張した。なんでかな。西野や咲たちと話すときはそう緊張しねーのに。やっぱ彼女、『女の子』だからっすかねぇ……でへっ」

「一つ忠告しておきたいが、その言葉を西野たちが今聞いていたとすると、ひどい誤解を受けると思うぞ」

「え？　そっすか？」

　呆けている瀬戸は放っておいて、大庭はガサゴソと自らのプレゼントの袋を用意する。

　なんとそれは、直径一メートル近くの巨大な袋であった……。

　遅ればせながら三年、神月里奈が部屋にやって来たのは、パーティも盛り上がりをちょいと過ぎたころであった。

「いよーう。やっとるかい。こりゃ、どーもどーも二宮ちゃん」

「あ、神月先輩！」

　神月がドアを開けて入ってくると、二宮はぱっ、と顔を輝かせた。今のところ一番馴染み深いのが神月なのだろう。

「おお、よしよし。ちゃんと来てくれたのね。ありがとう。うちの変態部長が嫌で来てくれないかと思ってたよ」

「いえ、そんなことは……」

　大庭が指で眼鏡を正す。「それはもしかして私のことを言っているのかね」

「ほかに誰がいるんだよ。いや、ともかくよかったよ。馴染んでるみたいで。さつきたちとは部活の話はした？　部活っていうかサークルなんだけど」

「はい！　しました！」

　演劇部は元々部だったが、幾代か前に同好会に格下げさせられてしまったのだという。名前をそのまま引き継いでいるのだ。

　二宮は細くしとやかな声で続きを語った。

「私、新入生歓迎会の劇は見れなかったので、そのときのお話などを」

「あぁ、あれは大変だったねぇ……」神月は苦笑した。

　前回の劇はひどいあり様だったという。

「夏目漱石の『坊っちゃん』の主人公をアタシやったんだけど、さつきが山嵐でさ。もうわけわかんなかったよ。稽古中に『これ本当にやれんの？』って何度も思ったし。男役だよ男役。江戸っ子の荒っぽい口調で喋るんだよ。よくやったと思うよアタシも」

「一番かわいそうなのはさつきだよ。着ぶくれるまで何枚も衣裳重ねて着て、顔真っ赤っかだったもん」

　どだい西野のようなボブヘアーのかわいい女の子に「山嵐」は向いてない。

　と、二宮が思うのは当然だ。

　ここのサークルは、クジ引きで配役を選んでいるのだ。誰も主役をやりたがるため、だとか、誰も主役をやりたがらないため、とか色々理由があるが、ここの大庭部長が去年から始めたことである。

　この規律は第二の権力者であるとある二年生によって絶大に支持されている。そのためしぶとく慣習となって生き残っている。

　人数が少ないために自然と必要とされたルール、というのも理由の一つかもしれない。「アタシは次は普通に女の役をやりたいね。男役も楽しいけど、今度はね」神月はひとしきり笑ってジュースを飲んでから、あっ、と思い出しものをするように声を上げ、バッグの中をゴソゴソと漁り始めた。「忘れてたよ。誕生日おめでとう。これ、誕生日プレゼントだよ、はい」

　神月はバッグの中から二枚のチケットを取り出した。二宮はそれを受け取って目を丸くする。

「これ、ミュージカルのチケット！」

「そう。学割で安く上がったからさ、予約しちゃった。二枚あるからさ、彼氏とでも行きなよ」

「えっ、あ、あの……」二宮は視線を下げて頬を少し赤くする。

　瀬戸が耳ざとく反応したのは言うまでもない。だが――、「私、男の人とは、あんまり、その……」

「なに？　いないの？　そんじゃあ、アタシと行くか」

「は、はい！　できるなら！　そ、そうだ。あのとき、五月の三十日空けといてというのは、このことだったんですね……」

「そ。驚いたろ」

　落ち込む瀬戸を放っておいて、女性陣が「いいなー、私も行きたいなー」「神月先輩、ナイスです」などと騒ぐ。

「それに引きかえ……」

　咲の呆れた眼が大庭へと注がれる。

　大庭はむっつりとしている。

「ねぇ、アタシさ。この部屋入ったときからずっと不思議になってたんだけど……」

　ひやりと冷や汗。その正体は不可解なものを見る故である。薄気味悪そうに指を指す先には、大量のＤＶＤの山があった。

「なに、これ？」

「大庭雅志の誕生日プレゼントです」

「んな馬鹿な……」神月はそのＤＶＤの山から一つ取ってみた。「これ全部かよ」

　世界名作ＤＶＤ集。その全巻セットがうず高く部室に積まれている。

「アンナ・カレーニナ。……武器よさらば。……ノートルダムのせむし男。……ローマの休日……」

「一年生の勉強になると思ってな。どれもこれも人類の偉大な才能の結晶だ」

「……」

　神月もさつきも咲も、みな黙っていた。

　二宮は引きつった笑みを浮かべ、瀬戸は大仏のような顔をしていた。

「これ……いくらしたの？」

「なに。プレゼントの値段などどうでもよかろう。私にとってはたいした額ではない」

　にやり、と勝ち誇った顔をする。が、当の競争相手の咲は悔しそうな顔など浮かべておらず、むしろ「どうしようもないな、こいつは」といった侮蔑の目で大庭を見ていた。

「おまえ、これ……どうやって持って帰らせる気だ？」

「あの、私、大丈夫です」おずおずと二宮が手を挙げる。「数回に分けて持って帰ります」

「本当に大丈夫？　迷惑だったら迷惑だって言ってもらっていいんだよ？」

「はい。本当に大丈夫です」

　ゆたかな微笑みである。「はぁぁ」と神月は感心してしまった。

「ほんっといい子だねぇ……アタシ、なんだか心洗われる気がするよ。よかった、大庭みたいなのが入ってこなくて」

「ふん。私のように誕生日に名作ＤＶＤ集を後輩に贈れる先輩など、他にいるわけがない」

「ああそうでしょうよ。いるわけがないよあんたみたいなやつ」

　ここで種明かししておくと、大庭は秋葉原の奇妙なゲームセンターのさらに奇妙なクレーンゲームコーナーでこの景品を引き当ててきたのである。もちろん釣ったのはぬいぐるみであったが、そのぬいぐるみで他の景品と交換できる仕組みになっていた。

　大庭のかけた金は、せいぜい三百円ほどである。コーヒー一杯分の値段である。

「私、こんなにお金のかかるものをいただけて、ちょっと戸惑いましたが、やっぱりすごく嬉しいです。これを機会に世界の名作を勉強しようと思います」

　西野や咲、加えて大庭のかけた金額を裏で知っていた瀬戸も、口を開けて感心してしまった。

「ふぉぉぉ」

「よし！　さすが私が見込んだ一年生だ！　これは期待できるだろう！」

「っていうか……そもそもあんたがあんな妙な入部テストなんかやらなきゃ、もっと一年が入っていたのに！」

　というのは、こういうわけである。

　大庭は今年度の新入生勧誘の際、入部テストなるものを用意した。お題は、「コーヒー豆の種類を答えよ」

　このお馬鹿なテストは、第一回サークル活動の際に「ただの部長のたわごとでした」と何でもない故が発表されたが、テストに落ちたり「やってられっかよ！」「どうして演劇とコーヒー豆の種類が関係あるんですか」と常識的解答をした人は去って行った。

　それもそのはずであるが、唯一、大庭の納得のいく解答を示したのが二宮だった。

「私、喫茶店で働いていたので、ある程度は知っていたんです。もちろん全てではないんですが……」

「いや、全てだった！」

　単に大庭の知識量を超えたというだけである。

「ほんと、大庭がアホなことするから……」

　大庭の中で、コーヒーブームが過ぎた今となっては大庭に反論できる手立てはない。

「いや、あのときはあれがよかれと思ってやったことなのだ！　ほら、他のサークルは入サークルテストなどやらないだろう？」

「劇団のオーディションじゃないんだから」

「一風変わったことをやってみたかったのだ！」

「大庭部長」咲がぼうっとした声で鋭い指摘を入れる。「大学の掲示板で名指しでネタにされてましたよ」

「うわっちゃー……」

　瀬戸と西野は頭を抱える。

「ふふん」ここでつけ上がるのは愚人のすることだが大庭はその範疇に入る。「私も有名になったというものだ！　これで劇の観客増員は間違いなしだぞ！」

　神月がいった。「おまえ一人で漫才でもやったらいいよ」

「え、なぜだ？」理由がわからない大庭は多分、というより絶対間抜けだ。

「私一人で観客独占してもつまらんしなあ！」

　うざっ！　という顔を神月は作った。得意になっていそうに見えるがその実大庭は部長としていいことをやったぐらいにしか思ってないから、つっこむだけ無駄だと常識人神月は考える。

「あとで覚えとけよ、大庭」

「え、何を？　だから」

「何でもないわ！」

「？」首をかしげる大庭。「何でもないのを覚えておけとは一体全体……」ともごもごつぶやいている。

　神月が怒っているように見えるから大庭は反論しない。

「さて、」

　と、ウザい大庭に背を向け、神月は二宮に微笑みかける。

「今思い出したんだけど、からもプレゼント預かってるんだ。覚えてる？　こう、髪が茶髪で目がキリリ、としたやつ」

「あっ。ものすごく綺麗な方ですね？」

「そう。嫉妬するぐらい綺麗なやつだよ。一応あいつ、ここのエースだから。今日レッスンで来れないから、って私にプレゼント渡してった。いや、あいつもいいセンスしてる」

　神月はバッグの中からＣＤケースを取り出した。

「はい。今度会ったときよろしくね。何でもできるスーパーマンに見えるけど、心は寂しがり屋だから、さ」神月は優しい顔で二宮にＣＤを渡した。「近寄りがたいって感じるかもだけど存外いいやつさ」

　二宮はそれを受け取ってじっとＣＤの表面を見た。

「私のお気に。百選……」

「そ。ＣＤ焼いたんだって。それ多分中身はクラシックだよ」

　おおー、と部室内が盛り上がる。演劇に縁がある連中だからかクラシックはみんな大好きである。

「わざわざ選んでくれたんだよ」

　神月は二宮の表情の変化を見ながら、言葉を反芻するように言った。

　二宮はそのＣＤケースを胸に抱いて、満面の笑みを作った。

「私……」

　涙が少しあふれたらしく、眼鏡を取り外して手の先で目をぬぐった。

「こんなの、初めてです。……高校とか、中学校とか、友人がいても、こんなのなくって……誕生日プレゼントとか変だって、思ってて……」

　西野や咲たち女性陣が二宮の肩をぽんぽんと叩く。

「泣くこたぁ、ないぜ」

　そう言うのは西野である。鼻メガネは取ってある。

「これから、自然にやってけばいいんだよ」

　咲の声音もいつになく優しい。

　二宮は涙を拭いて、にこっと笑う。

　そんな彼女たちの様子を見て、大庭と神月はそろって「ほんとにいい一年生が入ってくれた！」と首を縦に振った。

　大庭がポケットから折りたたまれた神を取り出した。一枚のＢ５のルーズリーフに、幾枚かの小さな紙片がある。

「よし。次の公演だ」

　大庭はそれをテーブルの上に広げる。

　みなの視線がそちらに注がれる。

「次の演目はもう決まってる。『ロミオとジュリエット！』」

「ロミオとジュリエット……」

　二宮の目が丸くなり、大庭と神月の間を行ったり来たりする。

　二宮の視線は無視して続けられる。彼女の視線は次に瀬戸のもとへ行く。それからすぐに戻してしまう。

「まず主役のロミオとジュリエットを決めるぞ。私が用意したこの紙きれの中から好きなものを取れ。どれか一枚はロミオでもう一枚はジュリエットだ」

　二宮は戸惑いながら紙を一枚取る。折りたたまれたものを開くと、そこは真っ白だった。

　各々も順次取る。

　二宮はじっと瀬戸のことを見ていた。それから大庭の顔を見て、期待するような不安がるような目をした。

「あの、何も書かれていなかった場合は……」

「ん。二宮さんは書かれていなかったのか。む」大庭は自分の紙きれを見た。

「ちっ。私も外れだ」真っ白な紙きれを見せて、白けた顔をする。

「何も書かれていなかったら他の役ということだ。今回は主役ではなかったようだな。君も私も」

　二宮は焦ったようにそわそわとした。

　それを不思議に思った大庭が「ん？」と目を丸くする。

「自分も白っすね」

「あ。わたしも～」

　瀬戸も西野もそれぞれ「白」い紙を表にする。

　咲が、眉を波打たせながら、紙面を睨みつけていた。

「あたし……」

「げっ！」その直後に神月の悲鳴が轟いた。

「また男役！　しかも主役！」

「あたし……ジュリエット役だ……」

　咲が「ジュリエット」のくじをテーブルに投げた。そして恥ずかしそうに顔を覆う。

　無事、主役が決まったことに対する拍手が送られる。

　そこで見るからにほっとしたのは二宮である。

「おめでとう。神月、美奈川！」

「うっさいよ！　アタシがロミオだってねぇ、似合わないに決まってんじゃんか！　あー……簡単な役がよかった……」

「……」

　咲は顔を手で覆ったまま何も言わない。

「そんなことないですってー。神月さんの男役はわたし的にグーです」

「そうかい……」

「あの、」

　と、そこで遠慮がちに声を発したのは二宮だ。

「神月さんが男性役をやるようですが」

「ん？　そうだよ。嫌だけどね。ロミオだよロミオ。あのぶっ飛んじゃってるポエマーだよ。かーっ、似合わん！」

「あの。それはそうとして、あのもし、」

「ん？　何が言いたいのだ？　さっきから何か言いたそうだが」

「はい。あの……」

　二宮は言いにくそうに目を逸らしつつ、顔を赤くした。

「クジで役を決めることはわかったんですけど……これがもし、その、」二宮は息を飲んだ。視線は大庭と瀬戸に向かう。「女性役が、もし、大庭先輩か瀬戸先輩だったら……」

「えっ」

　瀬戸が息を飲む。大庭が答えた。

「もちろんやる。ジュリエットでも何でも」

「男の人が女装を……？」

「もちろんだ。全力で女装する」

　しれっと答える大庭に、二宮がさらに顔を赤くした。

「ジュリエットが私でロミオが仮に瀬戸でも、私たちは役を遂行する」

「わぁ」

　二宮は顔を覆ってしまった。顔の隠れてない部分が茹で上がったように真っ赤になっている。

「あんまり二宮さんに気色悪い創造させんでください！」

「瀬戸よ。気色悪いなどと文句を言ってるようじゃプロの役者にはなれぬぞ」

「別にプロとか目指してないし！」

「っつーか、あたしらにも変な想像させんな！　ジュリエット役はあたしだ！」

「ほほう」ニヤリと微笑み。「さっそくヒロインの自覚が出てきたということだな。感心だ！

「はっ」

　咲は顔を覆ってしまう。

「恥ずっ……恥ず、はずかしー……何であたしが……」

「咲……あんた」

「かっわいい～」

「よかったな、咲！」

「よかないわ！」

　咲は顔をガバッと上げて近くのオレンジジュースを一気飲み。

　再び顔をうつむける。

「似合わない。似合わない。似合わないぃ～……」

「さっ、」

　大庭がペンを取り出し配役を紙に書きつける。

　残りの配役は埋まってない。

「残ったメンバーの役を決めるぞ。川島はいないから私が代わりに引こう！　フハハハハハハ！　おもしろくなってきたぞ！」

　一度決まった配役はもう取り消せない。

　くしくも、この夜、決まった役で一番後悔したのはこの中心人物、大庭であった。

　神月里奈は代々木のある小さいアパートに姉と二人で住んでいる。

　実家は関西のほうにあるが、姉がこちらで先に就職しており、その影響からか神月里奈も東京の大学を受け、姉のアパートに転がり込んだのだ。それから手狭になった前の部屋を引き払い、代々木の安全で広い部屋を借りた。

　姉が残業や合コンなどで夜いないと、神月里奈は大っぴらにラジオをつけて聞くのだった。

　神月はラジオのヘビーリスナーという裏の顔を持つ。それも、ただの聞く専門のリスナーではなく、メールの投稿がメインのリスナーだ。

　ラジオネームは「リナリナ」。

　神月はどちらかというと内向的な性格なのだ。みんなの前ではああいった仮面をつけて振るまっているに過ぎない。

　本当は可愛いものと読書が大好きな、清純美少女である。

　ちなみにこの「リナリナ」というラジオネームを持っている秘密は大庭と西野しか知らない。

「フンフンフ～ン」

　風呂上がりのしっとりとした髪をほどき、神月はベッドに横になったまま、傍らでラジオを聴いていた。

　彼女の手元にはノートパソコン。

　あるラジオ番組のメール投稿フォームに文字を打ち込んでいる。

「今日のネタはアタシ向きだなぁ……よしっ、どんどん送ろう」

　トークのお題は「表向きの自分、本当の自分」

　神月はトークコーナーにメールを送った後、ふと思いついて、カタカタとゆっくり文章を打ち始めた。

　投稿先：ふつおた

「こんばんは。京城さん宮さん！　わたしはいまとあるサークル活動で、劇をやることになってしまって、そこでなんと男役を演ることになってしまいました。なんとそこでは、全てクジで配役を決めているのです！　……わたし、困ってしまいました。しかもその男役は主役ですよ主役！　わたしはあまり人前の自分を良いと思ってなくて、もっと女らしい役をやりたいと思っているのですが、会長が頑固な人で、あんまり要望を聴いてもらえません。どうしたら思いが伝わりますか」

「う～ん……」

　神月はメールフォームを食い入るように見つめて、嘆息した。

「まっ、いっか！　送信！」

　どうせ引かれるわけないからね。ふつおたコーナーは他のネタコーナーで暴れ回っているヘビーリスナーにはアウェーなのである。

　あまり読まれていないリスナーを読んであげようとディレクターが采配するのか、常連組はあまり読まれない。

　せめて、このメールを誰かに読んでもらうだけでもいっか、と、神月はホームページを閉じ、シャットダウン、パソコンを閉じる。

　肘をベッドに立て、その手の上に顎を乗せ、神月はわくわくしながらネタコーナーを待つ。

　始まりにコントのようなフリートークパートが流れ、その後にＦＭらしいポップなタイトルコール、そしてＣＭが挟まれて、ようやく本編が始まる。

　あっ、自分の読まれた。ラッキー。

　と、ほくそ笑みながら聴いていると、番組は小休止、ふつおたのコーナーへ。

「ふつおた」とは、ふつうのお便りの略で、あまり番組の内容とは関係のない、恋の相談であったり、世間話のようなネタの投下であったり、わりと一般的なメールが取り上げられる。

『そんじゃ、ふつおた一枚目、ばばんといっちゃおうか！』

『ばばんって何だよ』

　笑いが起こりつつ、男のパーソナリティの方がメールを取る。

　軽やかな調子でラジオネームを読み上げつつ、彼は『ん？』と声を止めた。神月の方も「ん？」と頭をもたげる。

『ラジオネーム……『リナリナ』って。さっきも読まれてたよねぇ。なぁになぁに？　『リナリナ』調子いいねぇ。じゃ、さっそく読みましょう！』

　え、えぇ～……と神月は頭をかかえる。

　まさか読まれるとは思ってもみなかった……。神月は若干嬉しい反面、恥ずかしさをこらえながら、自分の赤裸々な告白文が読まれるのを黙ってじっと聞いていた。

『思いを伝えるにはどうしたらいいですか……っと。ラジオネーム『リナリナ』のお便りです。どう？　宮ちゃん』

『京城さん、女の子のかわいい文をまたいい声で読みますねぇ』

『そこは今関係ないでしょ？　ハハハハハ！』

『そうですねぇ――、』と女性のパーソナリティが声を改める。

『悩める青少年少女の皆さんにはよくありがちなものだと思うんですけど――』

『オレちなみに女役やったことあるよ』

『えっ、本当ですか？　なんかすっごく意外……』

『ガキの頃だっつーの……ハハハハハ、今、宮ちゃん何想像した？』

『いえ……何も……ええっと……』彼女は声を高くする。『って、言わすな！』

『はい！　というわけで、実際の彼女の相談に答えたいと思いますけども、これは、あれやね、純粋な悩みやね。宮ちゃんこんなんで悩んだことある？』

『ええ、ええ。ありますよ。表の自分と裏の自分のギャップ……って言っても、もう十五年近くも前ですけど』

『そこんとこ、経験者としてなにかアドバイスを』

『そうですねぇー』彼女は改まって親身な態度で語る。

『こういうのって、色々な解決策があると思うんですよ。私みたいに裏表抱えたまま年月過ぎちゃって、もうそれが自然？　みたいな』

『うんうん』

『それかもしくは、本当の自分を受け入れてくれる友達や恋人がいたり。……って京城さん、『うんうん』って何ですか。そこで同意されても困るんですけどぉ！』

『ハハハハハ！　次、次！』

『もぉー……。まぁ、それでね？　私みたいに問題抱えたまま大人になるのもアリっていえばアリなんですよ。『リナリナ』さんは、サークル活動……っていえば少なくとも十九歳？　もしくはもっと歳いってるよね？』

『そうやねぇ』

『だったら、もう裏表っていうことに悩まなくてもいい年齢じゃないかしら。ほら、よく言うじゃない、『本当のあたし』『本当のぼく』って。でもみんなこう思うわけですよ。裏もあって表もある。それが本当のあたしじゃないんかーい！　ってね』

『へぇ。いいこと言うねぇ』

『だいたいみんなそうだと思うんですけど、上辺の自分？　っていうか、いつもみんなに見せてる自分って、それは自分の中から生まれてきたものじゃないですか。れっきとした自分の一部なんですよ。それを『本当の自分じゃない！』って切ってしまうのは、どうなのよ、って思うわけですね』

『うーん……なるほどなぁ』

『だから『リナリナ』さんも、あんまり気に病まないで！　楽しんでいきゃぁいいじゃない！　えーっと……それで？』

『女なのに男役ってとこでしょ。ハハハ』

『そ、そっかぁー！　男役かぁ！　どんな役だかわからないけど、もし本当に嫌だったらそのサークル長さんにきちんと言ってみたら？　その、女の子っぽさ全開で』

『この、思いを伝える……ってところが、純情っぽいよな！　ハハハ！　あ、オレひとつこの子に言っていい？』

『どうぞ』

『『リナリナ』は男役向いてると思うぞぉ！　いつもネタ読んでりゃわかる！　いつもの調子で、男役、頼んだぜ！』

『はーい、頑張ってください！　では次のお便りいってみましょー』

　神月は「……」と無言で顔を枕に埋めた。

「あかん……」

　彼女は身もだえた。

「うち、だめや。女の子らしくとかできへん。……っていうかそもそも女の子って意味がわからへん……」

　溜息をついて、顔を上げた。

「そもそも大庭の前でそんなことしても意味があらへん……あほくさ」

　神月はラジオの音量を下げて、漫画を読み始めた。

　大庭は神月と昼、学生ホールで会って、脚本の打ち合わせをやっていた。

　大庭がノートＰＣの画面を睨んでいる。

「う～む……」

「あんたやっぱり、」

「いやっ！　違う！　断じて違うぞ！　ロミオとジュリエットなど少人数でもできるからな！　情熱と労力さえあれば！」

「できねーっつーの……。ねぇ、やっぱりエキストラ募集しようよ。来てくれるって。暇な学生なら腐るほどいるでしょ。何ならまたアタシの友達に声かけようか？」

「いらん！　他人の手など借りるものか！」

「そんなこといって……。どうせ新人勧誘のとき妙なテストやったこと、当てが外れた――ぐらいに思ってんでしょ。白状しちゃいな」

「そ、そんなことはない！」

　しかし大庭は、冷や汗をかく。

「もうちょっと骨のあるやつが残ってくれればと思ってるだけだ！」

「白状してんじゃん……」

　神月は椅子に横向きに座って、足を組んだ。

　キラリ、と金の細いブレスレットが光る。

「うぅ……ん、ロミオとジュリエットを我ら用に若干改変するしかないのか……」

「観客にロミオとジュリエットだと伝わらなかったら意味がないぞ」

「わかってる」

　大庭は威勢よく返事をしてＰＣ画面を再び見るが、やはりまた嘆息した。

　そこには配役の一覧が載っている。登場人物の多い演目なのに、肝心の役者は七人しかいない。それに照明や音響などは他サークルに協力を仰がなければならないことは大庭は完全に度外視しているようだ。

　それも無理がない――と神月は思う。予定だったら最低七人は新入生を取るはずだった。大庭の変人っぷりや日頃の活動ぶりに耐えかねて辞めていくのが二人ほど出るのを考慮に入れて……。

　しかし事態は神月の予想の斜め上を行った。

　神月は、殊勝にも大庭の手綱を自分が握れていなかったのを責めた。それほど価値を貶められていることを当の本人は知らない。

「ロミオとジュリエット以外、一人二役、いや三役はこなしてもらうことになりそうだ……」

「だから覚えてろって言ったでしょ、アタシ」

「あれはこういうことだったのか！」

　大庭は頭を抱えた。

　ロミオとジュリエット訳は他の役もやらせるわけにはいかない。主役だからだ。観客も二人の声や顔はよくチェックする。

　だから神月と先はそれで固定として、残る五人はそれぞれ一人二役以上こなすことになる。

　もちろん同一時間に同じ人間が二人存在することはできないから、配役は当然幕ごとの登場人物数と相談して決めることになる。

「ベンヴォーリオ役は川島だったな。……これ、第二幕のとこ、キャピュレット夫人もやってもらえないかな」

「うわ、きつくね？　それ」

　キャピュレット夫人の登場シーンの後に早速ベンヴォーリオの登場シーンがある。衣装替えの時間はあまりにも短い。

「大丈夫だ。そのシーンはロミオ、マキューシオをまず登場させて、歌とか踊りとか、漫才とかやってもらうから」

「って、えぇー……。真弓が着替えてくるまで？　こりゃ相当大変な演目になりそうだな」

「引幕は閉じておく。その外で二人で話してくれ」

　そのような調子で無謀としか言いようがない脚本が仕上がっていった。

「ぬぅ……」

「あんた……それは無茶だって！　アタシが言ったことは謝るから！　気に病むな！　人手が足りないからあんたが一番頑張れって言ったのは嘘だから！　アタシらも悪かったよ。ね？　だから、他サークルから人をもらおう？　ね？　ね？」

「他サークルからもらえるのは、裏方までだと決まっている。それも完全な善意だ。これ以上は甘えられん！」

「やめろ！　それは、あんたにとって無茶すぎる！」

「物理的に不可能ではない！」

　大庭はそう宣言し、カタカタとキーボードを叩き、ワードソフトを閉じた。シャットダウンのアイコンをクリックする。

　大庭の選んだ自分の役……それは、太守、僧ロレンス、乳母という三人の脇役だ。しかし脇役と言えども乳母やロレンスなどは劇中で最も存在感のある役だといわれるほど登場回数が多い。……それは、例えて言うなら、劇のやっている間、ずっと出演と衣装替えを繰り返しているようなものである。

「ロレンスと太守が同時に存在しなくてはいけないところはやりくりしておく。……あとは、すまないが、エキストラを約十名ほど、多ければ多いほうがいいが、くれ。以上……あとは頼んだぞ……」

「大庭ぁ！」

　大庭は打ち合わせを切り上げて、椅子から立ち上がる。ノートＰＣを鞄に入れて、脇に挟む。

「アディオス」と意味不明の挨拶をしてその場から去っていった。

　残された神月は、不安から嘆息し、改めて自分の先ほどまで汚したメモ帳を見た。

　ロミオ役――アタシ。

　神月は、頬杖を突きながら、覚えているセリフを呟いた。

　こんな塀ぐらい、軽い恋の翼で飛び越えました。

　石垣などで、どうして恋を閉め出すことができましょう。

「か～っ！」

　神月は自分のセリフに赤面した。

「恥ずかしいやつ……」

　がっくりと頭を垂れる。

「ある意味、ジュリエット役じゃなくてよかった……」

　神月はふと時計を見て、昼休みが終わるのに気がついた。席を立って教室へと向かう。

　は役者である。

　この「演劇部」で最も役者らしいと言えば彼女だ。どんな役だろうと引き受ける。悪役だろうと、やられ役だろうと、あるいは憎まれ役だろうと……。

　彼女は知っている。どんなものでも、「本物」には学ぶことがあると。そして経験の生かし方を。

　もっともプロの役者になりたいと思っているのは彼女である。

「ベンヴォーリオ役か……生き生きとやれそうね」

「そう？」

　咲が不思議そうに聞き返した。彼女は微笑んで頷く。

　瀬戸が腕を組んで尋ねた。

「川島は何でも嫌な顔しないで受けるな。主役じゃねーのに」

「あら」彼女ははにかんで笑い、手を振る。

「主役を演じたいのは確かよ。でも、他の役には他の役の奥深さがあるから」

　三人が部室でそう喋っていたところへ、二宮がやってくる。

「あの」遠慮がちに扉から顔を出す。「失礼します」

「あ」

　と、二宮と真弓が同時に声を上げる。

「こんんいちは」

「あ……」鷹揚と微笑む真弓に対して二宮は挙動不審になる。「こっ、こんにちは！　あの、お久し振りです！　忘れちゃってるかもしれませんが、私、二宮鷺子っていって……」

　真弓は、

「知っているわ。もちろんよ。誕生日プレゼント、贈ったもの。あのときは誕生日会に出席できなくてごめんなさいね」

　笑いながら手で、「どうぞ座って」と促す。

「どう、誕生日プレゼントは気に入ってくれた？」

「は、はい……」

　二宮は真弓の隣に腰を下ろしてどぎまぎする。

「ら、ラフマニノフが、一番……」

「本当？」

　真弓は大きく目を開いた。

「いいセンスしてるのね？　他には？　やっぱりモーツァルト？」

「は、はい。モーツァルトも、とてもよかったです」二宮は隣の真弓の顔をちらちらとみて、本当に綺麗な人だ、と思った。

「知っている曲は少なかったですけど、とても、よかったです」それに品もある。優しいだけじゃない、非常に洗練されていて、話す言葉一つにも輝きがあるような気がする。

「そう。モーツァルトは確かに素敵よね」そして少女のような微笑み。「でもごめんなさいね。私、ちゃんとしたＣＤを贈らなかったことに罪悪感があったの。でもそうするとあれもこれもって迷っちゃうから、仕方なくああすることにしたのよ」本当にどこぞのお嬢様じゃなかろうか。

「そ、そうですか……」二宮は顔を赤くする。

「まぁ、気に入ってもらえたんならよかったわ」

　真弓はぱちくりと大きな目を瞬かせた。

「は、はい……」

　なにか自分が場違いな場所に来てしまったような感じで、どうしようか迷っていたところへ、先ほど大庭部長からあるものを預かっていたことを思い出す。

「あ、そうだ。私、大庭部長から今度の脚本が出来上がったからみんなに渡しておいてくれって頼まれていたんです」

　二宮は手提げ鞄の内に手をつっこむ。そのとき、ぴくり、と真弓の眉が動いたのは二宮には見えなかった。

「これなんです」

「大庭部長は？」

　へぇぇ、これがそうなの、と声をもらすよりもまずこれである。

　二宮は、「え」と硬直し、少し困惑しながら大庭の様子を思い出した。

「先ほど、キャンパスの並木道で会ったとき、大庭先輩は忙しそうでした。やたら時計を確認して、そわそわしていたような……」

「……」

　真弓の眼が、スッ、と細められる。

　咲も難しい顔をしている。瀬戸は顔を手で覆った。

　二宮は何か自分が変なことでも言ったのかと心配になりながら、説明を続けた。

「先輩は、アルバイトに行かれるそうです。部室に顔を出している時間はないから、これだけ頼むと言われて、これを私にお渡しになりました。えっと……どうぞ」

　三人に脚本を手渡す。ぱら、と紙をめくる三人。

　どうしてだか二宮は気が落ち着かなかった。何か、自分が、知らずに重大な間違いを犯してしまったような……。

「……」真弓は険しい顔で脚本を読み続けていたが、あるとき、くわっと目を開いて、「なにこれ！」と大声を上げた。

「どっ、どうしたんですか！」

「私の役が三つになってる！」

「おれもだ……おれのは二つだけど、役が増えてる」

「えっ、えー！」

　この中で泰然としていたのは咲のみだ。ぼうっとしたような半開きの眼で、脚本をテーブルに置く。

「逃げたね、こりゃ」

「あんの男……」

　真弓は、今ここに大庭がいたら噛み付かん勢いで怒っていたが、しばらくすると馬鹿らしくなったのか、嘆息して、額に手を当てた。

「か、川島先輩……あの、逃げた、って……？」

「ん？　あー……えっと。ごめんなさい。取り乱したりして。大庭先輩が、無茶な脚本作って、逃げちゃったってことよ」

「逃げた、って……でも先輩はアルバイトへ……」

「その情報は嘘である可能性が高いわ」

　真弓は何でもないように言った。

「きっと今頃はどこか遠いゲームセンターで遊んでいることでしょう」

「そんな……」

　二宮はショックであった。

　大庭にだまされたことよりも、仲間内の彼の人望の低さに。いやむしろ、その人望の低い彼自身に。

「部長の言ったことが嘘である証拠ならいくつでもあげられるよ。試しに、電話をかけてみると……」

　咲は携帯電話で大庭の番号を発信してみた。しかし通話口からはお決まりの「現在電波の届かないところにいるか……」という無機質な応答が返ってきた。

「部長、バイトやってるときに電源切ったりしないから」

「はぁ……」

「大庭先輩……」

　真弓が呆れた溜息を吐いたのと同時に、二宮はがっくりと肩を落とした。

「こういうケースは今までいくらかあったから、気にしなくていいよ」

「……脚本に関することですか？」

「役数をいじられたのは初めてだわ」

　真弓は頭痛でもするのか額に手を当て続けている。

「それまではさつきちゃんから借りてたＣＤを無くしたとか、合宿所の予約が主に大庭先輩の手落ちで取れなかったとか、私と咲ちゃんが用意しておいた瀬戸君のバースデーケーキを、彼が自分用だと思って食べちゃったとか……」

「そんな……ひどい……」

「大庭の行動科学の見地からすると、」咲は眠そうな顔でいつものように鋭く言った。「やつはすぐ帰ってくる。でもその前に置き手紙が先。『反省しています』って書かれた紙を何らかの手段で用意してくる」

「べつに仕方のないことなのに。度胸がないくせに、妙なところで律儀なのよねぇ……」

「はぁ……」

　二宮が困った顔で脚本を見つめていると、部室の外で足音がして、扉が開けられた。

　西野だった。

「ちゃいーっす。お疲れさまでーす。ねぇねぇ、わたしすぐそこで大庭部長と会ったんだけどさ、何か、封筒渡されたんだよね。重要書類、とか言ってさ。そんな部長はこれからバイトだって。せっかくだから寄ってけばいいのに、って言ったのに。『いや』って青い顔して行っちゃった。何だったんだろうねぇー」

　部員一同はその西野の手の茶封筒を見た。

　瀬戸が、震える声で言った。

「先輩……それじゃ、二人いることになってます……」

「アホな大庭挙動は放っといて、その手紙、ねぇさつきちゃん、見せてくれる？」

「ん？　いいですヨ真弓ちゃん」

　一同はその茶封筒の中身を開いた。

「まぁ予想はしてるけど」と咲は思った。

　拝啓

　剛勇華麗なる演劇部の皆様。最近は暑さも厳しくなって参りまして、どこぞの美青年がコタツをしまうほどであります。

「書き出しからして大庭ね」

　さて、六月といえば梅雨の時期。雨がザァザァ鳴って、蛙もゲコゲコ歌い、朝顔が育つ季節であります。この時期に結婚することを西洋の言葉で「ジューンブライド」といい、まことに縁起がよく――

「ちょっとうるさいわね。とばしましょう」

　――という次第でありまして、来たるべき夏本番に向けて、学業と同じく心身共に一区切りつけるべく、演劇の公演を企画いたしましたところ、『ロミオとジュリエット』はいかがと、かの熱烈な美貌を持った神月女史がおっしゃいまして、私は「それは大変よいことです」と大賛成いたしました次第、ああ、そういえば、『ロミオとジュリエット』といえば、オペラ、バレエ、ミュージカル、映画と実に幅広く――

「ええい、うるさい！」

　と、こんな事態がございまして、この暗愚なる私めが、演出係、脚本、出演と三役を務めさせていただくことに相成りまして、真に多忙極まりんとは実にこのことをよく言ったものであります。さらに一昨日にあたっては部屋掃除、機能にあっては新作ゲームの発売日となっておりまして、我が下宿先ではてんやわんやの大騒ぎと相成り――

「テレビゲームやってるようじゃさほど忙しくもないようね」

　さて、実に長々と駄弁を弄してしまったわけですが、前置きはこの程度にしておきまして、そろそろ本題に移ろうという所存であります。

「長いですね……」

「何だかやけに人を苛立たせる手紙だわ」

　次作『ロミオとジュリエット』配役につきまして、演劇部員皆様に多大なご迷惑とご心労を強いることになってしまったこと、またその間接的な原因を招いたこの私の失態を、深く皆様にお詫び申し上げる所存であります。

　あれはただの出来心だったのです。

「……出来心だと言われてもねぇ」

　むしゃくしゃしてやりました。反省しています。

「本当に反省しているのかしら？」

この脚本につきましては、実に最善を尽くしたつもりであります。皆様に申し合わせなかった点につきましては、話せば必ず怒られると思った次第、卑怯なる性は重々承知、戦々兢々としてこのお手紙を西野女史に手渡した次第であります。

　どうぞお許しください。

　反省しています。

敬具

「……こんなもので許されようっていう根性自体が間違っているわ」

「まったく」

　真弓と咲は呆れてため息をついている。

　西野や瀬戸は苦笑していた。

「まぁまぁ、何だかんだ言って、一番大変なのは部長のほうだからさ。許してあげようよ」

「……」

　真弓は目元を押さえて、言った。

「いくら学生のアマチュア公演だからって、破茶目茶にもほどがあるわ」

　真弓は心の奥で納得いっていない原因の実態を一つ、思い描いていた。それは、自分に何の相談もなく役についていじくられたことであった。

　思っていただけで口には出さなかったが。

「大体、この人数で『ロミオとジュリエット』をやろうとすること自体間違っているよ」

「でもな、咲。もう決まったことだぜ？　結果から最初の決定をほじくり返しても、なんにもならんさ」

「……わかってるけどさ。亮太にそんなふうに説教されると納得いかない」

　瀬戸は笑っていた。

　真弓はじぃ～、っと瀬戸の横顔を見つめていたが、やがて目を外し、携帯電話を取り出した。

「ん？　メールでも来たの？」

「大庭雅志にメールしてやるわ。あとで部室棟裏に一人で来い……と」

「わーっ！　真弓ちゃん待って！」

「落ち着きなさい！」

　飛びかかってきた西野を手で押しやる。

「いくら大庭先輩だって闇討ちはひどすぎるよ！」

「誰も闇討ちなんかしないわ。ちょっと話をしたかっただけ。冗談よ冗談。……『部室棟裏の、喫茶アポロンに来い』……っと」

　真弓は送信文を書き終えて、携帯電話を閉じた。

「何だか釈然としないなぁ……」

「さつきちゃん。あなたが私のことをどういうふうに思っているのか、よぉくわかったわ」

　西野は慌てふためく。

「違うの！　そうじゃなくてね！」

　西野はただ大庭雅志が何か真弓を怒らせることをぽろりと言ってしまわないか、それのほうが心配であった。

「あの……ところで」二宮はおずおずと真弓に声をかける。

「この脚本は、どうなるんでしょう？　結構よくできてると思うんですけど」

　真弓はじっと二宮を見つめていた。

　その顔があまりにも真剣なので、二宮は不安そうに徐々に眉を下げていった。

「あの、やっぱり……」

「そのことも含めて議論してくるわ」

　真弓はそう言い、くすりと微笑んだ。

　二宮はほっ、と溜息をつく。

真弓は声をたてて笑った。

「そうもじもじしないでいいわよ。今ちょっとどうしようか考えてただけだから」

　真弓は二宮の肩を叩いた。

「ねぇ、ちょっとどう？　これから、倉庫に行って衣裳なんか見てみない？」

　突然のことで二宮は驚いていたが、願ってもないこと、興味のつきなかったことだったので、すぐオーケーの返事をした。

「あんたたちも来る？」

　壁に掛かっている倉庫の演劇部用のカギを取りながら、話しかけたが、

「あたし別にいい。二人で行って来たら？　ゲームでもしようっと」

「あ。あたしもー。ようし、対戦しようぜ咲ちん！」

「何か賭ける？　どうせあたしが勝つけど」

　真弓の期待は外れた。部長も部長で変だが、部員も部員だった。

　若干の期待を込めて瀬戸を見るが……、

「お……おれは……」

　瀬戸は目を泳がせ、口をもごもごと動かした。

　ちらちらと二宮と真弓を見て、

「……いい。二人で行って来いよ。おれはここに残って課題でもやってるわ」

　真弓は目を細めた。

「あっそ」

　二宮の手を引く。

「行きましょ。二宮さん。倉庫を案内してあげる」

「は、はいっ！」

　おれの馬鹿野郎ぉぉぉぉ……と心の中でうめく瀬戸であったが、その声が二人に届くはずもない。

「気をつけろよー」

　と、笑顔で送り出すが、内心では自己嫌悪の気持ちでいっぱいであった。

　真弓は不機嫌そうにそれを無視した。

　二宮は真弓に連れられ別の棟にある倉庫にやって来た。いつも喧騒に包まれているキャンパスと違って、ここには人気がなく、空気もひんやりとして冷たかった。

「こっちよ」

　真弓はジャラジャラとカギとそれについたキーホルダーを手でもてあそびながら、入り口近くの階段を降りていく。

　耳をすますと、かすかに人のいる気配がした。遠い人の声と、物のこすれる音が反響する。

　サークル『演劇部』の倉庫は地下一階の階段の近くの部屋にあった。鍵を開けると、凝り固まった空気が新たな生を得たかのように古い空気と外の空気とが交錯する。

「衣裳は……確かこっちね」

「わぁ……」

　二宮は足を動かさずに倉庫の有り様に見とれていた。

　数々の小道具。西洋風のテーブルセットやソファー。折りたたみ式になっている背景など、実に二宮にとって心踊らされるものばかりだったからだ。

　二宮は高校の頃美術部だったが、その美術部の倉庫兼部室といったら、こことは大違い、それこそ部員の私物置き場となっているだけだった。

　その有り様は道具を多く必要とする演劇の特色ゆえに生まれたものであろうが、二宮には「別格なところに来た」という感激の印象をもたせた。

　真弓が奥から戻ってきて、苦笑する。

「何を見ているの」

「えっ。あ、その、すみません。じろじろと見てしまって……」

「見たいのなら構わないわ。そうね、あれは昔の代にやったオペラ用のやつね。手先が器用で、プロ意識のあった小道具さんがいたのね。背景だってすごい出来だわ」

「あの。あれを、次回では使うのですか？」

「まだ何とも決まってないわね。そういうのは大抵神月さんと私で決めるけれど。でも、『ロミオとジュリエット』は昔何回もやった演目だから、きっと既に作られているものでできるわね。ほら、王道じゃない？」真弓は奥へと歩き出す。

　二宮もそれに従う。

「あ。確かに」

「二宮さんは『ロミオとジュリエット』のお話を知ってる？」

「はい。ロミオの親のモンタギューと、ジュリエットの親のキャピュレットが、ものすごく仲が悪くて、二人は愛し合っているのに引き裂かれてしまう話ですよね？」

「そう。大筋はそんなところね」

　真弓は衣裳部屋を開けた。ドアの付近の電気のスイッチを入れて、部屋は古い匂いと淡い光に包まれる。

「それでも事件のきっかけを作ってしまうのはその家内の者、ティボルトと、ロミオ、マキューシオ、ベンヴォーリオの三人なのよねぇ。キャピュレットはそもそもロミオのことを憎んでいなかった。血気盛んなティボルトを諌めるシーンがあるのよ。知ってる？」

「小学生のころ漫画で見ただけなので、あまり詳しくは……」

「あら」と、真弓は口元を押さえる。

「戯曲も是非読んでみて。でも、最もいいのは演劇ね」

　真弓は積んであるダンボールを持ち上げる。

「えーっと……どれかしら？　これじゃない。これも違う……」

「あの、川島先輩」

「なに？」

　真弓はドスンとダンボールを下ろした。

「川島先輩がやる役は、ベンヴォーリオですよね？　友達の」

「そう。ロミオの友達。もう一人マキューシオっていうお調子者の友達がいるんだけど、こっちはさつきちゃんね。あ、あった！」

　真弓はいくつかのダンボールを脇に押し分けた後に、お目当ての物を見つけた。

　蓋を開いて、衣裳を取り出す。

「でもマキューシオってとってもいい役よ。原作ではちょっとお下品だけど、私はそう悪い男だと思わないわ。おセンチなロミオも、彼の前では年相応な少年に戻るのよねぇ」

「ベンヴォーリオは？」

「ベンヴォーリオ？　どちらかというと凛々しい貴族の男性、って感じね。理知的でロミオやマキューシオを諌めたりするわ。ふぅ、探すのも疲れるわね……」

　真弓は額の汗を腕でぬぐった。

　手持ちぶさただった二宮はすぐにその隣につく。

「もしかして私の衣裳を……？」

「そうよ。あったりまえじゃないの」

「わわっ、すみません！」

　二宮の役はティボルトとパリスという役だった。どちらも凛々しい紳士の役だ。

「あら、これかしら」

「あっ……」

　真弓は一つの金ラメの入った衣裳を取り出した。赤色の礼服。

　血気盛んなティボルトの衣裳だ。

　真弓は口笛を吹きながら、二宮を立たせてその衣裳を肩に当ててみる。

「うーん……ちょっとサイズが大きすぎるかもねぇ」

　二宮は赤面した。

　真弓は鈴の転がるような声で笑う。

「大丈夫よ。袖をまくればいいんだわ。でも、そうね……お下げは解いたほうがいいかもね。あと眼鏡も取れない？　きっといい顔になると思うんだけど……」

　二宮の眼鏡に手を触れて、「いい？」と尋ねる。

　頷いた二宮。真弓はそれを取ると、目を輝かせて、「うふふ」と笑った。

「美人ねぇ。どう、よく見えるかしら」

　二宮は目を細める。

「えぇ……何とか」

「コンタクトはしないの？」

「コンタクト……怖くてつけられないのです」

「あらそう」

　驚いた真弓に、二宮はうつむいた。

「すみません……支障がなければ、裸眼でやりたいのですが、よろしいでしょうか」

「もちろん。私が決めることじゃないわ。そうか、つけられないんだ……」

「はい……」

「大庭先輩と同じねぇ」

「え？」

「彼も、つけられないんだって。『もう一生眼鏡でいい！』って言ってるのよ」

　おかしそうに笑う真弓に、二宮は目を瞬かせた。

　突然、部の中の変人として位置づけられていた彼が、自分の傍までやって来た気がした。

「そうなんですか……」

　顔が緩むのを抑えられなかった。

　二宮は嬉しいのだ。

　眼鏡推奨派が誕生したのがとても嬉しかった。そう、自分は一人ではないのだと。

「二宮さん。パリスの役の方は、眼鏡をつけて出てみない？」

「はい、いいですけど」

「そう。よかった」

　真弓は微笑み、二宮に眼鏡を返す。

　そして今度は緑色の服を持ってきた。高貴な紳士、パリスの衣裳だ。肩に合わせて吟味しながら、真弓はいう。

「パリスは、ジュリエットの婚約者の男ね。本当はもうちょっと背が高くて肩幅のある男の人にやってもらいたかったんだけど。でも、小さくてカワイイパリスというのもアリね」

「そうですか……」

　二宮はすこし落ち込んだ。

　真弓はそれを見ながらも、いう。

「例えば瀬戸君とかね。彼、パリスにうってつけだと思ったんだけど。キャピュレット役じゃあね。きっともう脚本はあまりいじれないわ。キャピュレット役を演じれるのは多分彼だけだから」

　ふと本音が混じったのを真弓本人が気づいた。ちょっと困っている二宮の眼を見つめて、自分をめた。

　相手は一年生なのに。なぜ自分は熱くなったのだろう。

「……ごめんなさい。単に、ティボルトやパリスなんて報われない役、あなたにやらせたくなかっただけよ」

「そうですか」二宮は目をかせた。

「うん。二宮さんとは、戦いたくないからね。ほら、ティボルトとベンヴォーリオは仲が悪いから」

「……そうですね」

　なるほど、と微笑んだ二宮に、真弓は、その後も遅い時間まで衣裳や小道具を出して、作品の解説をやっていた。

　咲が思いがけなく瀬戸の働いているラーメン屋に来たのは、夜の十一時を回ったころだった。

　瀬戸はアパートを借りている荒川の駅の近くのラーメン屋で働いていた。

　客の数も少なくなってきた閉店間際に、このちっこい同級生がやって来たので、瀬戸はぎょっとする。

「いらっしゃい。……どした、おまえ。こんな時間に」

「おじさん、こんばんは」

　咲は瀬戸を無視して奥の主人に声をかける。

「おーう。咲ちゃん。めずらしいなこんな時間に」

「うん……」

　咲とこのラーメン屋「五郎」の店主は知り合いである。

　ここに店を構えてから長いようだし、咲の地元でもあるので当然だが。

「店長、注文、本来ならさっきの客で終わりっすけど、どうします？」

「あぁ？　いーよいい。出してやれ。すまんね、咲ちゃん。今日は咲ちゃんでお客最後なんだ。注文は取ってやっけど、ちょっと途中で片付け始めてもいいかい？」

「はい。お構いなく」

「瀬戸」

「ういっす」

　瀬戸はおしぼりと水を持っていく。咲はラミネート加工されたメニューを眺めている。

　瀬戸はカウンターに水とおしぼりを置いて、言った。

「おまえ、おじいちゃんやおばあちゃんはいいのか？　こんな夜遅くに出てて」

「秘密だよ、馬鹿野郎」

　咲はメニューから瀬戸へと目を移して、いった。

「ばらしたら怒るから。別にばれたってじいちゃんたちは怒らないけど、失望させたくないから」

　そう言ってメニューへと視線を下ろしてしまう。

　ややあって、「とんこつ」とか細い声で言った。

「へい、とんこつ一丁！」

「あいよー」

　店主は麺を茹でる準備をする。「瀬戸。おれ、これ作ったら奥に引っ込むから、掃除頼んだぞ」「うーす」というやり取りをしてる間に、咲はお茶を飲む。

　瀬戸は布巾で咲のところ以外のカウンターを拭き、椅子を逆さにしてカウンターに乗せていく。

「なぁ、」

　たまらず声をかけた。どう考えたとしてもサイズと居る時間がおかしい友人は、「ん？」とらな瞳を向ける。

　ふとしいシャンプーの匂いがする。

「こんな時間に食べて、太んねぇの？」

「死んじゃえば」

「うぐっ……」

　瀬戸はお腹のあたりに見えないブローをもらった気がした。

「そんな、突然の悪意に応えられるほどボキャブラリーは持ってないぞ、おれは……」

「偶然だね、あたしもだよ」

　咲はカウンター脇に置いてある雑誌を読みながら言う。

「女の子にいきなり『太る』とか、悪意以外の何物でもないよ。ほんっと、亮太は女のことダメだよねぇ……さすが彼女いない歴イコール、」

「うっ、うるせぇよ！」

　咲はニヤニヤ笑う。

　瀬戸は狼狽した。

「瀬戸。何お客さんと喧嘩してんだ。口動かす暇あったら手動かせ、手」

「……はい。すんません」

　瀬戸はモップを手に取った。水をつけて床を磨いていく。

　何故、そんなことを言われねばならない。ただ自分は、心配をしただけだ。体重をあげつらったわけではない。なのに何故、責められねばならない。

　デリカシーなぞという男女差別の具現ともいえる言葉は、滅んでしまえ、と思った。

「へい、おまち。とんこつラーメンね。他には何か注文するかい？」

「いえ。お構いなく」

　店主は笑った。

「そうかそうか。もう人もいねぇから、ゆっくり食ってきな。話し相手にゃ瀬戸を使ってくれ。おい頼んだぞ、瀬戸！」

「へーい」

　ぞんざいな返事をする。店主も咲と亮太の関係はわかっているのだ。ひやかすように笑って店の奥へ去っていく。

　瀬戸は不用心なおやっさんだなぁ、と思いながら、モップをひとまず置き、を外しに外へ出る。夏の夜のしさがある。あいにく星は見えない。瀬戸は、都会へ出てきてから星をほとんど見たことがない。

　瀬戸は秋田の高校を出てから、上京してきた。はやく地元を出たいと思っていた。得意なスポーツに心血を注ぎながら、そんな強い意志を持っていたために勉強を怠ったことはなかった。

　瀬戸は努力を象徴するような人間だった。つねに向上心にあふれていた。それは、彼に遊びというものを顧みらせなかった。男友達が合コンの真似事をすると言っても、瀬戸はいい、と言って野球の素振りやランニング、あるいは受験勉強にあたった。

　そのころの高校生の瀬戸は、今の瀬戸から評するとなであったと言っていいだろう。女子に興味がなかったわけではないが、明らかに「恋愛」というものにかける時間は、瀬戸からすれば無駄であった。コンビニの駐車場の裏でたむろしてタバコを吸う時間などもってのほかだ。瀬戸はそういう付き合いを極力忌避した。

　力をつけなければならない、とつねに瀬戸は考えていた。

　それは何故なのか、と誰かに問われても、瀬戸は明確な答えなど持っていなかっただろう。ただ頑なだった。はやく力をつけて上京したいとばかり思っていた。

　それが大学に入って、上京して、変わったのだ。

「はぁ～……」

　店の中に戻ると、カウンターの隅っこで、咲が非常にゆっくりと、味わうように麺をすすっている。

　瀬戸が溜息をつくと、咲は不思議そうに振り返った。

「どうしたの？」

「疲れたんだよ。さすがに八時間も働くとな」

　瀬戸は変化した自分を知覚していた。

　焦ってばかりいた自分。他人よりも強くなること、巧くなることに心血を注いでいた自分。

　得たものは一体何だったのだろう。と、思ったのだ。

「いつもそんなに働いてたんだ、意外」

「おまえも一度くらいは社会に出て働けよ」

「別にいいんだもん、あたしは。奨学金もらってるし。勉強できるもん」

「その奨学金で今おまえはうちのとんこつを喰っているんだな？　ったく、このままじゃ卒業後ニート確定だぞ」

「そんなつもりは全然ないから安心しなよ。そう、夏が終わったら進路考える、いや来年、来期、いや、卒業までには……」

「卒業する時になって進路考えてたんじゃ、おまえフリーターだよ」

　しかもだんだん目標遠ざかってるし。

　なんだよ、と咲は口をすぼました。

　いいや何でも、と瀬戸は微笑んで手を動かす。

　そう、それは微々たるものだったと思ったのだ。

　上京してきて、大庭に会った。西野に会った。高慢ちきな咲にも真弓にもあった。

　本当に色んな人間がいることを知ったのだ。

　瀬戸には気づいたことがあった。頑張ることはただ手段だったのだ。それ自体が目的ではなかった。何も先が見えてない頑張りは、文字通り頑ななだけだったのだ。

　それ以来瀬戸は、本来人が持つべき領分を拾い集めるようになった。投げ捨て、打ち遣っておいたものすべて。

「さぁて、と」

　瀬戸は厨房に入り、そちらの掃除にかかった。水を出し、タワシに洗剤を入れて流しを綺麗にしていく。

「おまえ、とんこつ好きか？」

　食べている咲に話しかける。咲は口元に麺を持っていきかけて、止める。

「別に」

　それ一言だった。音も立てずに静かに食べる。スープも飛ばない。

「本当か？　じゃあ何が好きなんだよ？」

「別に好き嫌いとかないし。ラーメンは何でも食べるよ。その時の気持ちで選んでる」

「あぁそう……」

「だいたいラーメンなんてどこも何でも一緒でしょ。旨いものは旨い。どこが旨いと聞かれたら、『適当に旨い』と返す」

　じゃあ何でこんな時間に来てんだよ、と言い返す言葉を飲み込む。

　もくもくと食べている咲を尻目に、瀬戸はいつもの片づけを続けた。会話はもうそれ以上なかった。しだいに作業に集中していき、咲のことは忘れがちになる。

「ごちそうさま」

　ふと、背後で声がした。瀬戸は奥の方を向いていたので振り返る。

「お。もう喰い終わったのか」

「うん」とだけ咲は言った。

　結局何でこんな時間に何でこんなところに来たのか教えてもらえなかった。

「五八〇円ね」

　とだけ言って、咲の手を見る。お金のやり取りをして、「まいど」と見送る。

　お金をレジに入れて、何だったんだろうなぁ、と瀬戸は首をひねる。咲のために残しておいた片付けを終えて、着替えのために奥に行った。

　店主と挨拶をして外に出ると、店先にちっこい姿があった。

「あれ？」

　すっとんきょうな声を上げてしまう。その人影は寒そうに腕をかき抱いて、恨めしそうに瀬戸を見上げた。

「咲」瀬戸は慌てて羽織っていたパーカーを脱いで着せる。「おまえ、待ってたのか」

「別に」

　返事はそっけない。ぷい、とそっぽを向いてしまう。

「いいでしょ別に」

「そりゃあ構わねぇけどよ」

　瀬戸はぽりぽりと頭をかく。

「言ってくれりゃぁな。中でお茶でも出したのに」

「いや……なんか悪いと思って……」

「そうか？　別におやっさんに黙って出したって構わねーって」

　瀬戸はポン、と咲の肩を叩いた。

「――いや、そっか。待っててくれてサンキューな」

「……」

　また「別に」とでも言い出しそうだったが、瀬戸が笑って肩を叩くと、咲もふくれっ面をやめ、笑った、。

「せっかく来たから、一緒に帰ろうと思って」

「おお。そうか。んじゃ一緒に帰ろう」

「うん。帰ろ」

　瀬戸と咲は歩き出す。真っ暗な空に高架線がかかっている。その付近を街灯が白く照らしている。瀬戸と咲は高架線の下のコンクリートのトンネルを通っていった。

「ねぇ亮太。マック寄ってこ」

「ええ――……って、まだ食うのかよ」

「食べないよ別に」

　咲はすこし頬を赤らめた。

「ただ……その……寝れなくって」

　瀬戸はふと咲の訪れた理由に思い当たった。

「寝れないって？　まさか……」

「ええと……」

　咲はぽりぽりと頬をかく。「昼間に寝すぎちゃって……」

　瀬戸が返事をする前に咲はに言った。

「あのね！　勉強してたんだよ！　それと台本チェック！　活字ばっかりで頭が疲れちゃってね、それでね！」咲は手を素早く振った後、気落ちしたように溜息をついた。「なんか寝ちゃって……それがもうすごい爆睡で。疲れがたまってたのかなぁ……六時間くらい寝ちゃった」

「六時間？」と、瀬戸はぎょっとする。

「おまえ、いつ起きた」

「九時。なぜだか全然眠くなんないの。おばあちゃんは夕方起こしたって言ったのに。全然起きようとしなかったみたい」

「それでか……」

　咲が妙な時間に訪れたのも納得というところだった。きっと、眠れなくて退屈だったのだろう。

　咲は誰かと一緒なときは生意気なくせに、一人になったとたん、気が弱くなるのだ。深夜に一人になって寂しかったのかもしれない。

「ったく、しょうがねぇなぁ……」

「べつに明日休みなんだからいいでしょ」

「……あのな。人に物頼むんだからもうちょっと遠慮とかしろよ」

「何でそういうこと言うの。意地悪」

「それはこっちのセリフだ！」

　瀬戸は頭を抱えた。もとより一緒に行ってやるつもりだった。咲は嫌いじゃないし、もともとこれから一人で台本読みをする予定だった。

　ただしかし、瀬戸の頭のコンピューターは回り続ける。かよわい女の子を深夜何時まで連れ回してよいか。そしてこの子のおばあちゃんとおじいちゃんにばれないようにするためにはどうしたらよいか。また、ばれた時のために最低何時までに帰してやればよいか。

「……二時までだぞ。それまでなら付き合ってやる」

「うん。そのくらいなら眠くなりそう」

　咲は瀬戸のシャツの裾を引いた。

「ね、行こ」

　深夜にあまり出歩かないからだろう。自然目が子供っぽく輝いている。

「ちょいと待て。そのままじゃだめだ。おれに風邪ひかす気か」

　瀬戸はＴシャツ姿だった。

「もう十二時だぞ。いくら六月だからって真夜中になると寒い日もあるんだからな。ったく、何て格好だよ」

「……だって、わからなかったんだもん」

　二人は瀬戸の住んでるマンションの近くに来た。

「ちょっと上着と台本持ってくっから、おまえは……」

　ここで待ってろ、と言いかけて、今が深夜であることに気が付いた。加えてここは東京のど真ん中だ。秋田の田舎ではない。

　瀬戸はした後、

「……おまえも、一緒に来い。玄関の所で待ってろ」

　咲を引っ張って四階の自室の前に連れて行く。

　瀬戸は少し戸惑った。女の子を自室に招き入れるなんて初めての経験だったからだ。それは咲のような親友でも例外ではなく。

　ガチャリ、と鍵を開ける。

　咲が感嘆の声を上げた。

「おおー……初、亮太の部屋」

「あんまじろじろ見んなよ。ちっと荷物置いてくっから」

「へー……」咲は笑いながら言った。「やっぱ、男くさいね」

　瀬戸ははにかんで笑った。

「どうしようもねぇ臭いだよ。普段気付かねぇしな」

「そういうもんなんだ」

　咲は玄関先に突っ立っている。きょろきょろと部屋の中を見回している。

　最近になって改装したらしく、部屋の内装は外観に比べて真新しい。フローリングの床に、白一色の壁。男子なりに清潔感はありそうだったが、掛かっているポスターなどを見ると、やはり男の子の部屋らしかった。

「世界地図なんて貼ってんの？」

「ん？　ああ」

　瀬戸が戻ってきた。

「世界地図と日本地図……それに、これって……写真の切り抜き？」

「ああ。旅雑誌のを切り抜いたんだ。各国の土地の写真」

　その下にはメジャーリーガーのポスターなどが並んでいた。

「へぇ……。なんだか男の子っぽいね」

「そだな。はい、はい」瀬戸は咲を押し出す。

「サービスタイム終了。おしまいです」

「もー」

　二人は笑いながら階段を降りていく。

　コンクリートの床が靴に合わせてカツカツと鳴る。

「おまえ、自分のセリフ覚えた？」

「いや、全然」

「あっそ……」

　瀬戸は近くの二十四時間営業のマクドナルドに咲を連れて行き、そこでコーヒーを二つ買った。

「おれもまだ台本そう読んでねぇんだけどさ」

　先日最終版の台本がリリースされたばかりである。真弓が大庭にかけあった後も、大きな変更はなされてない。

「……って、聞いてるか人の話？」

「うん、うん」

　咲は真夜中の風景が珍しいらしく、しきりに目をきょろきょろとさせている。

「ねぇ、あそこの窓の外見える席に座ろうよ。電車見えるよ電車」

「あのな……」

　咲は真夜中にどこかを出歩いたことがまるでない。大学生なのに、と思う。

　咲の両親は早い時期に離婚し、母方の実家で暮らすこととなった。その母も小学生のうちに病気で亡くなってしまい、咲は残された母方の祖父母と暮らすことになった。

　父は養育費ばかり毎月送ってくれるのみで、もうほとんど親交がない。

　だからだろうか。

　咲は見事に年寄りたちの生活に合わせるようになり、本格的な夜遊びというものを経験したことがなかったのだ。

「ねぇ見て見て。まだ明かりついてるよ」

「終電まだなんじゃね？　ったく、しょうがない……」

　瀬戸は窓際の、プラットフォームが見える席に腰を下ろし、鞄から台本を取り出す。

「おまえ、台本は？」

「持ってるよ、一応」

　咲はデニムの後ろのポッケに、丸く筒状にした台本をねじ込んでいた。

「見事にしわくちゃだ……」

「見られりゃいいの。つべこべ言わないでよ」

　それから二人ともしばらくセリフ読みをしていたが、コーヒーが五分の一くらい減ったころになって、咲がふと声を上げた。

「ねぇ」

「何だ？」

「あたしこんな恥ずかしいセリフ言わなきゃならないわけ？」

　咲が示したのは、ジュリエットの、

「愛してくださるの、本当に？　ええ、と言ってください！」

「やさしい私のロミオ様、もしも愛して下さるなら、ねえ、正直に仰って」

　という序盤のセリフだった。

　まだロミオとジュリエットの恋が実る前のシーンだ。

「言うんだろ？　自分のセリフだし」

「何だか大庭部長の悪意を感じるんだけど……」

「そう恥ずかしがることないんじゃないか？　しょせん役の上だろ？」

　演技にならないじゃないか、と瀬戸は言う。

「そ、そうなんだけど……」と咲が口ごもる。

「あたし、こういう役、やったことがなくって」

　頭を抱える。

「恥ずかしいというか何というか、恥ずかしいというか……」

　咲はそういえば主演で女性役をやるのは初めてではなかったろうか。一度『銀河鉄道の夜』でジョバンニ役をやったことがあるが、こうまで乙女な役は初めてだ。

「おまえなぁ……」

「ただの怖がりだってことは重々承知。でも、人の目とか気にするんだよ……あたし、ジュリエットみたいに可愛くないし、性格も良くないし、ドレスなんか絶対に会わないよ。……メイドさんが適当な感じ」

「メイドって言うな。これは乳母だ」

「じゃあ使用人でいいよ！」

「使用人はエキストラがやることになってる」

　咲は目を潤ませて突っ伏してしまう。嘆息がその奥から聞こえてくる。

「はぁ……」

「大丈夫だよ。ジュリエットは、設定では十四歳、ってことになってるし」

「なにそれ。慰めてるわけ？」

　とうとう声に涙がんだ。

　瀬戸はい顔をした。咲のぐずつきが始まった。これは二度ほど経験したことがある。一度目は好きな先輩に振られたことで、二度目は高校の頃の友達と大喧嘩したときであった。

「泣くなよ」

「泣いてなんかないよ」

　くぐもった声に涙が混じる。

「亮太の馬鹿」

　瀬戸はどうしたもんだろうかと思う。

　コーヒーをすすり、窓の外を見ると、ちょうど目の位置の高さにプラットフォームが見え、夜の中に鋭い光を放っている。

　停まった電車からは仕事帰りのスーツ姿のおじさんや若者が吐き出される。

　その頭上にはと月が灯っている。

「咲。かけ合いやってみようぜ」

「え？」

　若干顔を上げたが、咲はハッとしてすぐ顔を伏せてしまう。

「いい。やらない」

「いいから。顔、上げろよ」

「……上げれない。顔、ひどいし」

「ひどかねぇよ。いくぞ、おれから」

「ちょ、ちょっと待って！　まわりに人がいるって！」

　咲はやっと顔を上げる。

「いねぇって。どこ見てんだよ」瀬戸は咲の顔をすると、ふっと笑って、その顔から目を逸らして体を横に向けた。

　足を組む。

「あー……おれロレンスやるわ。おまえジュリエットね。第四幕第一場四六から」

「ちょ、ちょっと待ってってば！」

　**ロレンス**　ジュリエット姫、そなたの悲しみはもうちゃんと知っている。

　　わしもいろいろ考えてみたが、どうにもわしの知恵には及ばぬ。

　　この木曜日には、どうでもあの伯爵と結婚しなければならぬ。

　　なんとも延ばす手はないということだな。

　**ジュリエット**ですから、なんとかそれがやめになる工夫、

それを教えていただけないなら、この話聞いたなどとは、

仰らないで下さいませ。

もし神父様のお知恵ででも、どうにもならぬということならば、

どうぞ私の決心をよい分別と仰って下さいませ、

さすれば、この懐剣で、今にも私は片をつけてみせますわ。

「できるじゃねーか」

「……」

　瀬戸が横目で皮肉げに言った。咲は台本で口元を隠し、上目遣いで瀬戸を見つめた。

「……セリフ変じゃなかった？　あたし、声上擦ってない？」

「大丈夫だよ。これを大声で、しかもそらで言えるように練習しねーとな」

「……そっか」

　咲はうなずきつつも、自らがひとまずジュリエット役を演じることができたのに自身がついたのか、顔に安心が戻ってきた。

「そうだよ。こんな小声でちょちょっと言えたって、あんま意味ないって。舞台の上でかまずに言えることが大事なんじゃん。あー……あたし大丈夫かな。ちゃんと言えるようにしないと」

「練習、練習」

「うん」

　咲はうなずいた。

「でも、どうしてロレンスなの？」

　瀬戸は瞬いた。

「だっておれの役のキャピュレットはジュリエットと険悪なんだもんよ」

「……そうなんだ」

　咲はまじまじと瀬戸を見つめた後、台本に目を落とし、それからちらりと上目遣いで瀬戸を見つめ、

「ありがとね、亮太」

　笑った。

　六月も半ばを過ぎ、雨よりも晴れの日が珍しくなってきたころ、

「よーしっ！」

　演劇『ロミオとジュリエット』は七月中旬公園に向けて本格的な練習に入っていた。

「第二幕第二場からスタートするぞ！　ロミオとジュリエット！」

　台の上にジュリエットが立ち、物陰に隠れつつロミオが近付く。

　練習の場所は学校の共同演習室。その一つを演劇部が借りている。ここは他にも声楽サークル、軽音サークル、あとダンスサークルが借りている。毎週一度の練習しかできないのだ。

　それでも各メンバーは意気を上げて練習に取り組んでいる。

　**ロミオ**シッ！　なんだろう、あの向うの窓から射してくる光は？

　　あれは東、すればさしずめジュリエット姫は太陽だ。

　　美しい太陽、さあ昇れ、そして嫉妬深い月を殺してくれ。

　　月に仕えるのあなたが、主人よりもはるか美しいそのために、

あの月はもう悲しみに病み、色蒼ざめているのです。

　　もう月の処女になるのはよして下さい。月は嫉妬深い女神なのだ。

　　おお、あれこそはわが姫、わが思い人だ！

　　いや、まだそうと僕の心が通じてくれればいいと思うばかりなのだが！

　**ジュリエット**　ああ……。

　**ロミオ**　なにか言っている。

　　おお、光輝く天の使いよ、もう一度口を利いて下さい。

私の頭上はるか、この夜の闇に輝くあなたの姿は、

いってみれば思わず振り仰いで、瞳を凝らす、

驚きに満ちた人間どもの眼に映る、あの翼美しい天使の姿、

あの動くともなく流れる雲に駕し、はるか虚空を漂い浮かぶ天使の姿の、

あの神々しさにも似ている。

　**ジュリエット**　ああ、ロミオ様、ロミオ様！　なぜロミオ様でいらっしゃいますの、あなたは？

　　あなたのお父様をお父様でないといい、あなたの家名をお捨てになって！

　　それとも、それがおいやなら、せめては私を愛すると、誓言していただきたいの。

　　さすれば、私も今を限りキャピュレットの名を捨てて見せますわ。

　練習は基本集まれるメンバーのみで行うが、今日は瀬戸と真弓以外は全員集まっている。基本的に出席率は高い。それは、みながこの「演劇部」に何がしかの愛情を抱いているからだ。

　練習は八時をもって終了し、その後は参加できるメンバー同士で「飲み」に行く。

　と言っても、そう人数も多くない今となっては、近くのファミレスに行くことの方が多い。「のどの調子が悪くなる」という理由で酒を飲みたがらない人間がほとんどでもあるからだ。

　大庭はいつものごとく部室を閉めて近くのファミレスを選び西野と二宮、それと神月を連れて行った。

「まったく、私の人選は的確であったな」

　大庭は席につくなり腕を組んでそんなことを言った。

「べつに、役はくじで選んだんだろ」

　それでも脚本の都合によっては変更されることもあり得る。

「美奈川のあの初々しさときたら、あれを見るだけでこの演目、あの配役にした甲斐があったな！」

「先輩……黒いです」

「咲がいない間だけだよ、こいつは」神月が顔をしかめて皮肉げに言った。

「先輩、一時は公演が無理かもしれないって、あんなに落ち込んでたのに」

　西野は半ば呆れて大庭を見つめつつジュースを飲む。

「なにはともあれ、だ」

　大庭は台本をテーブルの上に投げた。

「役者は揃った。証明、音響の補助も取りつけた。これで公演ができるぞ！」

「あんたの早着替えが一番見ものだよ」

「なにおう」

「ふーん」神月はそっぽを向く。

「あぁそうであった」

　頭を抱える大庭。

「早着替えの極意を川島に教わらねば……」「

「大変ですねえ」

「まったくだ！　我ながらとんでもない役を引いてしまった！」

　もっと楽がどこかでできないか考えようではないか！

　そう、大庭がいたときだ。

「あれー？」

　浮ついた声が入り口から聞こえる。

「雅志とじゃん」近付いてくる。

「久し振りじゃねぇの」

　大庭たちが顔を向けた。直後神月は険しい顔を作る。

「」

「よう」

　挨拶をした男は大庭と瀬戸の中間ぐらいの上背。髪は淡い金色に染まっており、耳にはピアスの輝き、タバコの臭い、見下すような眼、常に微笑を浮かべている口、そして背後の黒いギターケースが特徴的な男であった。

　裕二と呼ばれたその男は、後ろにいた男女数人に目配せすると、一人でこちらの席についた。

「あぁ疲れた。で、なに？　あんたら、今サークルの帰り？　『部室』とやらでだべってたりしてたのか？」

　男の口調には人を小馬鹿にするような調子が含まれていた。

「別に。あんたは？」

「おいおい。教えてくれないわけ？」男は癖のように手を擦り合わせた。「オレは、サークルの帰り。っつってもバンドのメンバーのみで集まったんだがね」

「ふーん」

　神月はさも興味なさそうにジュースを飲んでいる。

　一瞬で盛り下がってしまったこの場の空気に、二宮は不安を抱いていた。

「加賀よ。久し振りだな」

「おう。馬鹿野郎の雅志か」

「どうして部活に来ないのだ、というのは私もいささか言い飽きたな」

　加賀と呼ばれた男は、顔をしかめて「べっ」と舌を出した。

「こっちも聞き飽きたっつーの。それに言い飽きた。オレは行きたいときに行く。それとおまえらの活動は『部活』じゃねぇ。『サークル活動』だっつの」

「我々は待っているからな」

「へん」加賀は苛立たしさを露わにして、鼻頭をこすった。「おっ」

　西野と二宮が瞬きした。

「さつき。どうよ、どう思う？　こんな馬鹿みてぇに人に来い来いって言う前に、自分らでオレを来させる努力をしてみて然るべきだよなぁ？　それで、ちっとはそれに成功したみてぇだ」

「は、はぁ……」

「ねぇきみ、一年生？」

　加賀が二宮に顔を近付ける。

「は、はい……」

「演劇とかどうよ？　楽しい？　いや、楽しいんなら楽しいんでいいんだがね、たまに飽きが来ない？　だいたい地味にクラシックなんか聴いて文学の真似事なんてやったって人を腐らせるだけだよなぁ？　アソコまで腐っちまうぜ？　ハハハハハ、ま、なにか注文しろよ。今日オレらここで人待ってて、来たら消えるけど、オレのおごりだよ。あ、雅志君、悪いけど金貸してくれ。三万ほど」